
招かれざる客の輪舞曲

リゾット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

招かれざる客の輪舞曲

【Nコード】

N5231R

【作者名】

リゾット

【あらすじ】

概念術 それは『概念』そのものを操る技術体系。世界は固有の法則によって動き、その法則を概念術によって利用することで独自の文明を築き上げていた。唯一、『この世界』を除いては……。日本概念省・入国管理局に所属する少年、各務勲弥^{かがみいざや}は、ある不運な少女・吉川天満^{よしかわてんま}の命を救う。しかしそれがきっかけで、勲弥は天満を巡る争いに巻き込まれていくことになるのだった……。

第一話 「私は死なないから」

少女が、殺されかかっていた。
だから、少年は少女を助けることにした。
ただ、それだけだった。

「……………」

状況は、極めて単純。
夜。

人気の無い駅前。

紺色のブレザーを着た少女と、白いスーツを着込んだ金髪の男。
男は少女ににじり寄り、右手に携えた剣で少女の命を刈り取るう
としている。

恐怖のあまり、なのか、少女は悲鳴を上げることもしなければ、
逃げ出すこともしなかった。否、出来ないでいた、というのが正確
なのか。

何はともあれ、このままでは少女は殺されてしまうことだけは間
違いない。

故に、少年は走った。

男の剣が振り上げられ、それがまさに振り下ろされんという瞬間
だ。

少年の身体が、男と少女との間に割って入ったのは。

「何……ッ!？」

動揺を見せたのは、男の方だった。

男からしてみれば、突然現れた誰とも知れぬ少年が、剣を止めた
のだ。

少年の腕が、まるで盾であるかのように、凶刃を受け止めたとい
うその状況は 男にとって予測不能、予定外の事態であったこと

に疑いは無い。

思わぬ闖入者の出現に対し、男は即座に剣を引き、バックステップを踏んで後退。

「……何者だ」

男は眼前の少年を睨み付けつつ、尋ねる。

対する少年は、まるで何事も無かったかのような、この事態が日常の一部でしかないとも言つような、そんな平然さで以って、男の問いに答えた。

「日本概念省・入国管理局。不法侵入者の取り締まりに来た」

その答えは、男にとって最悪のものだったのか　苦々しげに舌打ちをする。

「やはりな。だが、まさかこの結界に気づき、侵入してくるとはな」
「因果を隔絶した空間を作成する結界技術は、数ある術式の中でも最もポピュラーなヤツだ。使えばどうやったって気づかれるさ。：

…まあ、アンタの結界は、外部にその発動を悟られないタイプのものであったらしいけど、運が悪かったよ」

少年は、少女を背中に隠し、男の前に立ちはだかる。

学ランを纏った、本当にどこでもいそうな雰囲気の子供だった。

唯一、その右眼の色が真紅であるという点だけが、変わっているといえる。

むしろ、平凡な雰囲気纏っているからこそ、紅い右眼の異常性が際立っている、とも見える。

「ご愁傷様だ。因果体系概念術師　『狩人』ロベルト・ブラック」

己の名を呼ばれ、男　ロベルト・ブラックは、僅かにその身を硬直させる。

そんな反応を見逃さず、追い討ちをかけるように少年は述べる。

「既に身元は割れてるんだよ、ロベルト・ブラック。お前は異世界からこの世界へ無断で立ち入り無断で滞在している『不法滞在者』であり、入国管理局はそうした連中を、どんな手段を使っても排除する」

少年の眼光が、刃の如き鋭さを帯びる。
殺気とは違うが、確かな威圧感を備えた視線。しかし対峙するロベルトは怯まない。

さっ、とロベルトが手を振ると、手に持っていた剣が掻き消えた。
「そういうことであれば、仕方あるまい。お前を排除し、目的を遂行するまで」

「『目的』ってのは、何だ？ この子を、殺すことか」

少年は、己の背で庇った女の子を一瞥する。

男は答えない。代わりに、男は右手を振って、その手に新たな剣を出現させた。

どこからともなく、一瞬で。

「お前が一体、どんな概念術を使っているのかは知らないが。それを打ち破る概念を用いればよいだけのことだろう。……次は防げないぞ」

「……異なる場所から物体を取り寄せる……因果律を捻じ曲げる因果体系概念術お得意の技だ。

けど、それがどうした」

あくまで、少年の態度は揺ぎ無い。

怯まず。

臆さず。

相好を 崩さない。

「……君、ちよつと離れてて。危ないから、さ」

後ろを振り向いて、少女に避難を促す少年。

言われるがまま、少女は少年とロベルトから距離を取る。

そして、少年と『狩人』が、対峙する。

『狩人』 ロベルト・ブラックは、疑念に眉をひそめた。

……こいつは一体、何者なのだ？

そもその誤算は、この少年がロベルトの作成した結果

隔絶

空間内部に侵入してきたことである。

ロベルトの作った結界は、因果的に孤立しており、外界とは隔絶されている。

通常、そんな大規模な隔絶空間を作り出せば、必然、他の概念術師に気取られる恐れがある。隠密に行動しなければならぬ者にとつて、それは致命的だ。

この世界は、他のどの世界よりも異世界の存在を歓迎しない。限られたごく小数だけが、その身分を偽るなり隠すなりして生活をしているのだ。自分のような『不法滞在者』は、容赦なく排斥されてしまう。それでも、やらなければならぬことがある以上、『不法滞在者』で在り続けるほかなかった。

そういった『不法滞在者』は、概念術を使いたがらないものだ。概念術というのはこの世界においては『異なる世界の法則を持ち出す術』と同義で、本来ここにあるはずのこの世界の理、世界のあるがままの姿を、一時的・局地的に変じさせる。そこには何らかの『ひずみ』が生じ、その痕跡を他者に気取られる恐れがあるのだ。

だがロベルトは、『作ったことを周囲に悟られない結界』というものを作り出すことが出来る。空間を重層化し、標的だけを重層空間に連れ込むことで、『狩場』を作り出す。表面上、そこに何ら変化は見られない。故に、その空間自体に気づかれない。

その術式から、ロベルトは『狩人』の異名を頂いているのだ。

普通ならば、『狩場』は外部に気づかれないものだ。『狩場』そのものが因果的に孤立しているのであり、それを認識するという現象自体が、本来であれば成り立たないのだ。『狩場』を認識することが出来ているのであれば、そこには因果が成立しうるのだから。

目の前の少年は、いとも容易く、それをやつてのけた。本来、不可視にして不可侵たる筈の『狩場』に易々と侵入してきたのだ。

それだけで十分に、『狩人』の沽券に関わる事態である。

……それにしても、隙だらけだ。

随分と余裕でいるようだが、目の前の少年の構えを見る限り、格

闘技の心得があるようには見えない。

だが、自分の剣と標的との間に割って入った能力があることを考えれば、近接戦闘においてそれなりの力を持つと見てよいのだろう。「隙だらけだつて、そう思つたろう?」

こちらを指差し、少年はそう言った。

まるで心を読まれたかのような言い方、そしてタイミング。

……落ち着け。

これはハツタリに過ぎない、と自らに言い聞かせる。

ここで動揺しては、相手の思う壺だ。

もしくは人の心を読む術式の使い手なのかもしれない。もしそうであるならば、なおのこと動揺してはいけない。迂闊なことを思考するだけで 状況は不利になる。

「攻撃、してこないのか?」

不適に、少年は微笑する。

まだ年若いのに大した余裕だ、とロベルトは思う。自分の力を過信しているか、酔っているか……何にせよ、そういう余裕は身を滅ぼしかねない。

年齢は関係ない。実力がものを言うのが概念術師の世界だ。だが己を過信し身を滅ぼしていくのはいつだつて若者なのだ。

かく言うロベルト自身もまだ若者ではあるが、それでも、過信すること勿れと己に言い聞かせ続けてきたものだ。何が起るかわからない、常識などまるで当てにならない世界で生き続けるために、そうしなければならなかった。

油断はしない。

過信もしない。

ただ 意志だけを持つ。

目的を遂行する意志。

獲物は確実に狩らなければならない それが狩人としての、矜持。

『狩人』ロベルト・ブラックは、『獲物』を見据える。

少年の背後に庇われている少女。

少女こそが、ロベルトの標的だった。彼女を殺すことで、ロベルトの目的は達成される。

「標的は……やっぱこの子か。何でこの子を狙う？」

どこか呆れたような声色で、少年が言つてのけた。

……心を、読まれた？

だが、この程度のことではいちいち驚いてもいられない。

己の標的が見抜かれようと、関係は無い。少年も一緒に狩ればいいだけの話だ。

「この子は、ごく普通の学生じゃないか。何の理由があつて、この子の命を？ いつから『狩人』は弱いもの苛めをするようになったんだ」

立て続けに少年は言葉を並べ立てるが、ロベルトには答える気は毛頭無かった。

沈黙は金。

目の前の少年は消すべき敵でしかなく、対話の必要性すら無い。

「……答える気はない、か」

少年は嘆息。

「じゃあ、あんたを叩き潰した後で、ゆっくりと調べることにするよ」

言葉。

と、同時。

少年が、動いた。

ロベルトの眼は、少年の動きを捕捉する。

直進。

地面を強く蹴った少年は、馬鹿正直に、こちらに向かって直進してきた。

この上なく、読みやすい軌道だ。そこに何の意図があるのかは分からない。

だが、迎え撃つのみだ。

ロベルトは右手に持った剣で、迷わず横薙ぎ。

対する少年は、こちらに向かって右手を突き出してくる。

その動作が何であるかは分からない。攻撃なのか、それともロベルトの剣を防ごうとしているのか……。

どちらにせよ、攻撃を止める意味は無い。だからロベルトは剣を振り切った。

「っ！」

果たして　ロベルトの剣は、少年の右腕を下方から斜め上へ向けて走った。

切断。

少年の右腕が、すっぱりと、切り落とされる。

腕から分離した腕が、宙を舞う。

血が、溢れ出る。

「……………ああ……………っ！」

苦痛に少年は顔を歪め、膝をついた。

ショック死してもおかしくはない激痛だっただろう。どちらにせよ、おびただしい出血量を見る限り、放っておいてもすぐに失血死する。

決着を、ロベルトは確信した。

少年はもう　戦えない。

「言っただろう、『次は防げない』と」

切っ先を、地に膝を着いている少年の顔に向ける。

「その剣……………やっぱり防御無効化武装かよ……………」

ロベルトは答えない。

だが、内心で思う。少年の答えは、半分合っている、と。

この剣は、無論、ただの剣ではない。概念術が付加された武装だ。先ほど、少年は何らかの手段を持って、ロベルトの剣を素手で防いでみせた。そのときにロベルトが使ったのは、単純に、攻撃力を概念術で底上げた剣だった。鋼鉄であろうと容易く切り裂く剣であつたのだが、結果として、少年に防がれてしまっている。

ならば、違う概念を用いればいい。

この剣に付加された概念は、『この剣による攻撃を防御するものを斬る』というものだ。

『防御』という概念そのものに対して攻撃をする、防御不可能の剣。

防御無効化ではなく、防御破壊。

つけられた銘が『守人殺し（シールドブレイカー）』だ。

どんな術式を使っているのか、などということは、この際どうだっ
ていい。

少年が取る手段が『防御』である限り、この剣は不敗なのだから。先ほどの少年の意図は分からないが、少年はロベルトの剣をその手で『防御』しようとした。だから『守人殺し（シールドブレイカー）』は少年の右腕を破壊したのだ。

無論、それらの情報を少年に教えてやる真似などしない。

瀕死の獲物を前に饒舌になる狩人は、返り討ちに遭うのが鉄則なのだ。

だからロベルトは、沈黙を貫いたまま、空いているほうの手

左手に、先ほどの剣を呼び戻す。

『守人殺し（シールドブレイカー）』の欠点は、明確な『防御』を行っているものしか斬ることが出来ない、という点だ。『防御』という概念を直接に切断する故に、それ以外のものを斬ることは決して出来ないのである。

だから、目の前の無防備な少年に止めを刺す前に、別の武器を用意する必要があったのだ。

……念のためもう一本貰っておこう。

用心深い『狩人』は、左手の剣を、少年の左肩に突き刺した。そのまま、振り下ろす。

「がっ、ああああああ、う……っ！」

切断こそしていないが、最早まともに動かすことも叶わない。これで、両腕は封じた。

あとは首を落として、それで終わりである。

……終わってみれば、呆気なかったな。

左手の剣を、振り上げる。

その時だ。

「……終わって、ない」

真っ青な顔で、少年は、笑った。

その笑みに不気味さを感じ、ロベルトの剣に躊躇いが生まれる。

それは、一瞬。

だがその一瞬が、時として命取りになる。

「『接続』！」
「ネクシオン」

少年の体から、光で出来たプラグのようなものが飛び出し、ロベルトの胴体に突き刺さる。

ロベルトの身体が、少年の身体と接続される。

「《彼我の差は無い》……！」

次の瞬間、変化が生じた。

最初に目に付いたのは、停止。

それまで少年の体から流れていた、おびただしい量の血液が、止まったのだ。

そして瞬きをする間に、少年の傷口が塞がっていく。

……馬鹿な！

ロベルトは驚愕するが、変化はそれに留まらない。

再生。

確かに切り落とした少年の右腕が、切断面から再生されていく。

再生、というよりは、再構成、という感じだった。明らかに、生物の自己再生機能とは一線を画している。

変化が終了する頃、少年の身体は完全に五体満足なものとなっていた。

完全回復した少年は、間髪入れず、ロベルトの顎にアップパーカッ
トを決めた。

不意打ち。

顎を揺らされ、ロベルトはバランスを崩す。

だが、仰け反ったり倒れたりすることはない。ぎりぎりのところで最低限の体勢は維持し、左手の剣を突き出す。狙いは少年の心臓だ。

その刺突を、少年は左手で止めた。そうだ、普通の剣は防がれる。

……いったい、どんな術式を使っているっ……！

だが、右手に持つ『守人殺し（シールドブレイカー）』ならば。

あらゆる防御を撃破するこの剣ならば、関係ない。

ロベルトは左手の剣を手放し、右手の『守人殺し（シールドブレイカー）』を上から振り下ろす。

それに対し少年は、無謀にも、拳を繰り出してきた。

……馬鹿が！

先ほどと同じ結果を迎えるだけだと、ロベルトは思った。

だが、違った。

少年の拳は、『守人殺し（シールドブレイカー）』を、すり抜けた。

「な……っ！」

その結果、拳は真っ直ぐ、ロベルトの顔面を捉える。殴りぬけた。

ロベルトの身体は、後ろに大きく仰け反る。

そのまま姿勢を制御できず、ロベルトは仰向けに倒れた。

そして少年は、そんなロベルトを見下ろす。

「……その剣が防御を無効化する概念武装だっていうなら、こっちは防御をしなければいいだけの話なんだよ」

血色の戻った顔に、それでも疲労の入り混じった表情を浮かべて、少年は言う。

「だから、『防御』じゃなくて『攻撃』で迎え撃てばいいのさ。…

…まあ、すり抜けるとは思わなかったけど……。その剣は、『防御』という概念に対してのみ効果を発揮する武器……。概念武装だってことが分かれば、こっちのものだ」

危ない賭けではあったけどな、と苦笑しながら少年は二本の剣を拾い上げる。

「貴様……一体何者だ……？」

「僕か？ 僕は、入国管理局所属、全一体系概念術師 各務勲弥^{かがみいさや}だ」

「全一……体系、だと……」

その名を、ロベルトは知っている。

全一世界。

謎に包まれた、噂だけが一人歩きするような、世界。

そんな未知の世界の、未知の概念術を使う少年。

……とんだ化け物がいたものだ、この世界、この国に……。

無数に存在する世界で唯一、物理法則が完全に安定し、概念術の発達する隙のなかったこの世界。

そんな世界の中でもこの日本という国は、特に温い空気で包まれていると、ロベルトはそう評していた。だがその認識は改める必要があるだろう。

……ここは、退かせてもらう。

このまま捕まってやるような真似はしない。

これ以上無様を晒すことは、狩人としてのプライドが許さなかった。

素早くロベルト・ブラックは起き上がると、まずは己の作り出した空間隔絶術式を、解除した。

結果、『狩場』が元の空間に回帰する。

夜の駅前。

相変わらず人気は少ない。自分たちの姿は傍から見れば突然出現したかのように見える訳だが、それを目撃された心配はしなくてもよさそうだった。

次いで、術式を展開する。

「っ、逃げるつもりか！ 待て！」

少年が手を伸ばしてくるが、一拍遅い。

捕まるより早く、ロベルトの術式が発動した。

「くそ、逃げられた」

少年　各務^{かがみいさや}勲弥は、地面を蹴り飛ばして毒づいた。

あとちよつとのところで、ロベルト・ブラックの姿が掻き消えてしまったのだ。

因果体系概念術ではポピュラーな、空間移転術式だろう。『今ここにいるから、 n 秒後にはそこにいる』という因果を捻じ曲げることで、 n 秒の間にどうやっても到達不可能な地点まで瞬間移動することが出来るのだ。

「とにかく、局の方に連絡……っと」

携帯電話を取り出したところで、先にしておかなければならないことがあったのを思い出した。

勲弥は、少し離れたところにある街路樹の陰に隠れている少女の姿を見つける。

驚いてしまったのか、腰を抜かしてしまったようで、少女は地面に座り込んでいた。

無理もないことだった。

「きみ、大丈夫だった？」

とても怖い思いをしたであろう少女を少しでも安心させようと、勲弥はつとめて優しい言葉をかける。立ち上げられるよう、勲弥は手を差し伸べた。

「……………」

対する少女は頷き、自力で立ち上がった。差し伸べた手が無視されてしまったことは寂しいが、自分で立てる力があるのならそれで十全だ。

勲弥は少女を見る。かなり長く伸ばした黒髪が特徴的で、随分長いことを髪を切っていないんだろな、と想像してしまう。

やや前髪が長すぎて顔立ちがはっきりとは見えないものの、かな

り端正だ。美人と言っても差し支えは無いだろう。右眼側の泣き黒子が色つばい。

しかし、無表情。

というよりは、無関心にすら見える。

少女は恐らく、勲弥とロベルトの戦いを見ていた。いたいけな少女に見せるのははばかられるほどに血なまぐさい戦いであつたが、勲弥にそこまで気を遣う余裕は無かつた。

一歩間違えれば死ぬ。

そういう世界に、勲弥はいるのだ。

「君、その制服……三千院学園だろ」

少女のブレザーの胸元には、私立三千院学園の校章が見える。

それと同様のものが、勲弥の学ランの襟元にもあつた。

「僕もなんだよ。二年B組の各務勲弥だ。よろしく」

そう言つて、勲弥は同じ学校に通っている少女に握手を求める。

だが、少女はそれに応じない。

……しまった、流石にさっきのはショックすぎたか。言葉を失つてる。

無理もない、と勲弥は少女の心中を察する。いきなり殺されかけたり、目の前でファンタジーじみたバトルを展開されれば、人間誰しも混乱するに決まつている。

ましてこの少女は、勲弥の腕が切断されるというショックキングなシーンまで目撃しているのだ。そんな状態の人間と日常会話をしようとする方が間違つている。

……こういうところが、デリカシーが無いと言われてしまふんだらうか。

そんなことを考えつつ、どうしたものかと頭を掻いていると、少女がその口を開いた。

「二年A組、吉川天満よしかわてんま」

ぽつりと、少女は名乗つた。

……なんだ、隣のクラスかあ。

少女がとりあえずは話が出来る程度には元気だと分かって、勲弥は安堵する。

いたいけのない少女にトラウマを植えつけたなどということになつては、やりきれない。

「怖かつただろ、吉川。でも、もう大丈夫だから」

「……ありがとう、各務君。でも、別に怖くはなかったわ」

吉川は、どこか憂いを帯びた表情で、そう言った。

その表情に、勲弥は何か引っかけりを感じる。

少女の表情はまるで、助かってしまったことが不都合であるかのような、そんな意図が見て取れるような気がしたのだ。

「私は、死なないから」

「死なない……って」

冗談を言っている風ではない。吉川の表情は至って真面目だ。

真面目に、とんでもないことを言っている。

「助けてくれて、ありがとう、各務君。お礼に、一つ忠告しておくわ」

そして吉川は、自嘲の笑みを浮かべ、言った。

「私に近づかないほうがいいわ。不幸になりたくなければ」

第一話 「私は死なないから」（後書き）

こんにちは、リゾットです。

この作品は、ジャンルのには現代ファンタジー、といえるでしょうか。

終わりのクロニクル、円環少女あたりの影響が結構強めです。今まで書きたかったジャンルで、結構前から書き溜めてた設定を出していけるかと思うと何だか嬉しいですね。

どうぞお付き合い下さいますようお願い申し上げます。

感想、評価、批評、web拍手等いただけますと、とても嬉しいです。

第二話 「その噂について」

吉川天満よしかわてんまに関わると不幸になる。

勲弥いさやは、放課後の教室でそんな噂について幼馴染が語るのを聞いていた。

時は放課後。

校庭から運動部の掛け声が聞こえてくるが、教室内は静かだ。

教室にいる人間は、自席に座る勲弥と、机を挟んで向かいに座るポニーテールの少女のみ。

その少女 東雲しのめあけみ暁美は、言う。

「噂自体は去年くらいからあったんだけどね。まあ、去年出席日数ギリギリだった勲弥は知らないだろうけど」

皮肉交じりの一言に、勲弥は苦笑する。

好きで学校に来なかったわけでもないのだが、その事情を彼女に説明することは出来ないし、何を言ったところで無断欠席が多かったのも事実なのだった。

暁美は続ける。

「吉川さんも、勲弥と同じくらい学校に来ないんだけどさ。たまに来て、誰とも話さないで、ずっと一人でいるんだって。昼休みなんかは、よく図書室にいるらしいんだけど」

「お前、ホントにそういう情報詳しいよな」

勲弥は感心しきりだ。

そもそも東雲暁美という少女は、文武両道、品行方正、容姿端麗という、非現実的なほどに万能な人間だ。社交的な性格をしているから友人も多いし、教師陣からのウケもいい。

……剣道部のエースで、クラス委員で、成績は学年トップ、ね。

それに比べて自分は、と勲弥は自嘲する。

去年だってあわや留年と言うほどの出席日数と成績を収め、二年生になった今でも落ちこぼれ街道まっしぐらの身分である。万人が

認める優等生である暁美とはまさに正反対。幼馴染でもなければ、まず関わりあうはずがなかっただろう。

「勲弥が疎すぎるの」

呆れたように溜息をつく暁美。

何やかんやと勲弥の身を案じて、色々と世話を焼いてくれる。この幼馴染に対しては、勲弥もいつも頭が上がらない思いをしている。「勲弥はもっと、人と関わりあった方がいいよ。……ちょっと聞きたいんだけど、勲弥ってこの学校に友達何人いるの？」

「二人」

沈黙。

具体的に言うと、暁美が絶句していた。

しかし、事実なのだから仕方がない。そもそものラインから他者を友達と呼べるのか、勲弥には今ひとつわかっていないが、明確に『こいつは友達だよ』と断言できる人間が、この学校には二人しかいなかった。だから、二人と答えるほかないのだ。

「……ちなみに、その二人の内訳は？ まあ、一人はあたしってことでいいのかな」

頭を抱えながら、暁美は尋ねる。

「一人は暁美だとして、もう一人はほら、一妃^{いちひめ}」

「ヒメちゃんね……。ええと、ちょっと信じがたいねこれは……」

本気で引いている様子だった。

驚愕、といった表情である。

「勲弥さ、変わったよね」

「……………」

「勲弥は、変わった」

遠い眼をしながら、暁美は言う。

過去を、回想しているのだろうか。

過去は、こうじゃなかったーと。

それは、勲弥自身も自覚するところである。

自分は、こうじゃなかった。

ただ、変わった。変わらざるを、得なかったのだ。

「中学時代までは普通だったのに。去年で、何か色々変わっちゃったよね」

「……ま、まあ。色々と思うところがありまして」

「何なの、その右眼のカラーコンタクト。格好いいと思っちゃってるの？」

そこを突かれると痛い。

とある理由から、勲弥は右眼だけが赤色だ。左目は無論、日本人らしい黒なのだが。

周囲にはあくまで『お洒落だ』と言い張り、カラーコンタクトということにしている。評判は芳しくない。母には苦笑いされ妹には『お兄ちゃんそれ痛いよ』と真面目な表情で言われてしまう程に。

「ひよつとしてさ、勲弥。アウトローな自分格好いいとか、思っていないよね」

「それは、ない。そんな浅はかな人間じゃないぞ、僕は」

「それはどうかな」

幼馴染の視線が厳しい。

勲弥は溜息を漏らす。

「……僕の話はいいんだよ。それより、吉川の話に戻ろうぜ。『吉川天満に関わると不幸になる』って？ その噂について、聞かせてくれ」

「まあ、お小言はこの辺にしておいてあげますか。

で、ええつと、そう。吉川さんって多分、友達とか、いないんだよね」

暁美の言葉には小ばかにするような雰囲気は全く見られない。東雲暁美は人の陰口など決して叩かない。そういうところが、他者からの信頼を集めるのだらう。

勲弥が二人と言うのなら、吉川天満は○人。

友達が、いない。

誰とも 関わらない。

「ホントに誰とも話さないし。学校行事にも参加しないし。吉川さんと話したことある人、この学校に何人いるんだろう……って感じらしいのね」

「それはそれは……。僕の方がマシじゃねえの」

「そういうの、ドングリの背比べって言うのよ」

返す言葉もなかった。

「でも吉川さんって、なんて言うか、美人でしょう？」

勲弥は頷いた。

入学当初、学年の中でも一際端正な顔立ちの美少女ということで話題を集めていた、気がする。

「だから吉川さんに言い寄る男の人とか、いたらしいんだけどね。去年の内は」

「今はいない、って？」

「そう。皆、『不幸になった』らしいの」

告白したらこっぴどく振られた、などというのは序の口、軽いレベルであるらしい。

学校帰りに交通事故に遭って入院したり。

野球部のファールボールが頭部に命中して入院したり。

階段から転げ落ちて入院したり。

それだけではない。吉川天満の態度が気に入らないとして彼女をいじめようとした女子全員が、皆何らかの被害を被っているのだという。

その事故に、吉川が関わっていたというわけではない。だが、偶然だとして片付けるには、あまりに出来すぎている。

「……そういうことがあったから、誰も吉川さんに近づかなくなっちゃったのね」

「なるほど」

彼女に関わった人間が、皆（文字通り）痛い目を見ているのは確かなようだ。

それが偶然であるならば、それに越したことはない。何ら問題は

無い。

問題があるのは、偶然でない場合、だ。

偶然としか思えないような現象が、必然性を伴って起きるということこそ、問題なのだ。

「……で、勲弥は何でいきなり吉川さんについて知りたい、なんて言い出した訳？ まさか、吉川さんに惚れちゃったとか？」

「んなわけないだろ」

今まで他人と関わりを持たないでいた勲弥が、突然、同じクラスですらない女子について話が聞きたいなどと言い出したなら、確かに暁美としては気になるところだろう。

……別に他人に興味が無いわけじゃないんだけどな。

人間嫌いの厭世家を気取っているつもりは毛頭ないのだ。

「ただ、ほら、僕さ、昨夜その吉川の命を救ったもんだからさ。気になって」

「……イタイ」

言って、暁美が勲弥から目を逸らした。

最早目も合わせたない、という意味がありありと見て取れる。

勲弥は何一つ嘘をついていないのだが、暁美が信じられないのも無理はなかった。

勲弥が身を置く世界は、暁美のいる世界とはあまりにも違いすぎている。

「……まあいいや。気にしてもしょうがないし」

そう言って暁美は溜息をついた。

「でも、噂は噂と言っても、気をつけてね。吉川さんが悪い人だとは思わないけど、ひょっとしたらタチの悪いファンみたいなのがバツクにいるのかもよ」

「ん？ それって、どういう意味だ？」

「だからさ。吉川さんのことが好きで好きで仕方が無い人がいて、寄り付く男どもを影で一掃してるのかもしれないじゃない」

それは一種のストーリーカーではないのだろうか。

と言っか、流石に裏を読みすぎだろう。

「……お前も結構想像力豊かだよな、暁美」

「な、何よ。バカにしてる？」

暁美は、顔を赤らめ眉を立てる。

その反応を見るに、冗談の類では無かったのだろう。

「まあ……そういうことも無いとも言いきれないしな」
「何にせよ注意はしておくべきだろう。」

吉川天満に何かあるのは、間違いないのだから。

第三話 「偶然って、あるもんだな」

職員室に用事があるという暁美と別れ、勲弥は一人学校の階段を下っていた。

……自分から職員室に行くなんて、優等生はやっぱ違うんだな。勲弥が職員室へ行くのは決まって呼び出しを喰らった時だ。成績や出席日数についてあれこれと言われるのがいつものパターンとなっている。お陰で勲弥は、自分の意思で職員室に近づこうなどとは決して思えないようになっていた。

あそこには嫌な思い出しかない。

「お」

階段を下りきり、昇降口に辿りついたところで、自分の下駄箱の前に立つ少女の姿に気づく。

下駄箱に背を預け、何かを待っている様子の少女。

何より目を引くのは、その銀髪だ。くるぶしの辺りまで伸びたロングヘアは、非現実的なまでに純粋な銀色だった。そしてその両の眼が持つ色は、勲弥の右眼と同じく、紅だ。

浮世離れた外見の少女は、一人、夕日をバックに立っている。

その光景は幻想的ですからあり、彼女の姿を見慣れている勲弥ですら、少しばかり見とれてしまった。

「一妃」

勲弥が少女の名を呼ぶと、銀髪の少女 そのさきいちひめ 園崎一妃はこちらを向いた。

「勲弥」

名を呼ばれた一妃も、こちらの名を呼ぶ。

「悪いな、待たせちゃったか」

「うん。十分くらい」

「……正直でよろしい」

苦笑を浮かべながら、勲弥は靴を履き替える。

既に靴を履き替えていた一妃は、一足先に昇降口から外に出て行く。

「美冴が待つてる。勲弥、早く行こう」

「そうだな。昨日の奴……『狩人』の件も気になるし」

現在、ロベルト・ブラックの行方は、入国管理局が追っている。

入国管理局、といっても、それは世間一般に知られているものは、別の組織だ。

紛らわしいことこの上ないのだが、カモフラージュの意味も込め、あえて同じ名前のままにしてあるらしい。

勲弥が所属するのは、一般に知られているほう　法務省の内部部局ではなく、概念省の内部部局である。概念省という組織自体が一般には知られていない機関であり、入国管理局もまた同様である。その業務は、異世界からやって来る人間　『異民』に関する事案を取り扱うこと。昨日のように、異世界から侵入してきた概念術師を武力を行使してでも捕縛したりもする。

この地球上に沢山の国々が存在しているように、この『世界』の他にも、無数の『異世界』が存在していて、そしてその異世界から人間が訪れているのだ。

ただ、そうした異世界の存在は、公にはされていない。様々な事情や思惑があつて、殆どの国々が協働して異世界の存在を隠匿しているのである。

そんな世界は恐らくこの世界だけだろう、と言われている。

「勲弥、昨日の敵、強かった？」

学校を出て、二人で道を歩いていると、一妃がそんなことを尋ねてきた。

「ん。まあな。流石に『狩人』の異名を取るだけのことはあるよ。

概念武装も持ってたし……」

物体ではなく概念そのものに対して攻撃可能な概念武装は、数多く存在するものではない。稀少度は高く、それを巡って血生臭い争

いがあることすらあるのだ。

「でも、勝ったんだね」

ほんの少しだけ、一妃は嬉しそうに口元を緩めた。

一妃は感情表現を苦手としており、昔など全くの無表情だったくらいだ。ここ最近になって、ようやく少しだけ表情の変化が見られるようになってきたが、それでも、一妃とそれなりに付き合いのある人間でないと変化を見破れない。

現時点でそれが出来るのは、勲弥と、あとは一妃の保護者である美冴くらいだった。

「嬉しそうだな」

「ん。勲弥が無事に帰ってきてくれて、よかった。

あと、『全一世界』の力が負けなくて、よかった」

『全一世界』。

それは無数に存在する世界の中でも、特殊な世界だった。

だった、と過去形で表現されるとおり、今はもう存在していない。滅びてしまった。

否 滅ぼされたのだ。人の手によって、意図的に。

そして、その世界の唯一の生き残りが、誰あろう、この園崎一妃なのである。

一妃は、全一世界が育てた力 全一体系概念術について、こだわりを持っている。その力が他世界の力に負けることを、よしとしないのだ。

…… 僕の責任も、重大だよな。

勲弥はこの世界の人間であるが、諸々の事情から、全一体系概念術を扱う概念術師となっている。

普通、自分の所属する世界の概念術を使うのが概念術師なのであるが、この世界だけは例外だ。無論、相性や素養といったものが関わってくるが、この世界の人間は自分好みの体系を選び出すことが出来る。

とは言え、そもそも概念術そのものが存在しないこの世界では、

新たに概念術師になる人間も決して多くない。例えば親が異民であるとか、或いは異民犯罪に巻き込まれたとか、そういう事情でもない限り、概念術に触れることなどまずないのだ。

勲弥の場合は、輪をかけて特殊な事情で、異世界に、そして概念術に触れることとなった。レアケース中のレアケース、と周囲からは言われている。

「私も、行きたかった」

やや不満げに　これも、殆どの人間は分からないほどに微細な表情変化なのだが　一妃は言った。勲弥としては、苦笑するほかない。

「いや、ごめん。概念術の発動をたまたま感知したもんだからさ」

「私、ずっと局で待ってたんだよ。なのに、局の方で異空間の痕跡を感知した時には、もう勲弥が全部終わらせちゃってた」

昨日、勲弥が吉川天満救出に向かえたのは、実のところ、本当に奇跡的な偶然でしかなかった。

用事があって入国管理局の方に行くことになっていたのだが、遅刻ギリギリだということで、運悪く電車が人身事故で止まってしまい、仕方なく走って局まで向かう羽目になった（バスやタクシーを使うという選択肢は、この時はなかった。それだけ慌てていたのだ！）。そして走っている途中で、たまたま、概念術の気配を感じし、隔絶された空間　ロベルト・ブラックの『狩場』に侵入したのである。

ロベルト・ブラックについては以前から聞いていた。『狩人』の二つ名を持つ概念術師が、日本で暗躍しているという話を。

しかし、近くまで行かなければ、『狩場』に気づくことは出来なかっただろう。その意味で、あの時人身事故が起きたのはラッキーだったと言つべきなのかも知れない。事故で亡くなった人がいることを考えれば、不謹慎な物言いではあるのだが。

「まあ、しょうがないよ。そういうこともあるって」

諭すように、勲弥は一妃の頭を撫でてやる。

つややかな銀髪に触れると、さらさらとした感触が心地よかった。綺麗な髪だなあ、と感想を心の中で述べつつ、しばらくその感触を味わう。

「それに、一妃が戦う必要なんて無いんだぜ」

「……そんなことない。私だって戦えるよ」

「そりゃあ一妃が強いのは知ってる」

まともにやり合ったら、勲弥ですら勝つことは難しいだろう。

『全一世界』の遺産　園崎一妃が持つ力は、それほどまでに強大だ。

勲弥は既に、そのことを身をもって知っている。

だが、だからといって。

彼女が戦わねばならない理由にはならない。

一妃には、他にもっと経験すべきことが一杯あるはずなのだから。

「……あつ」

道を歩いていると、突如、一妃が立ち止まった。

「どうした、一妃」

「落し物」

そう言つて、一妃は、電信柱の根元に落ちている財布を拾い上げた。

革製の財布で、二つ折りのタイプだ。

「ホントだ」

「落し物は交番に届けましょう……合ってる？」

首を傾げる一妃に対し、勲弥は微笑んで頭を撫でてやった。

一妃はこの世界における社会常識に馴染んでいないので、日々の教育が欠かせないのである。

そのあたりは一妃の保護者である園崎美冴からも一任されている勲弥であつた。

「交番、駅前にあつたよな。丁度いいな」

どの道、局に向かうには駅に行つて電車に乗らなければいけない。そのついでに財布を交番に届けることにする。

「一妃、持っててくれるか」

「うん。全力で届けるね」

何かの使命感に燃えているのか、一妃は小声で「落し物は交番に

……」などと呟いている。

まあ、何事も経験だろう。

意気込みがあるのはいいことだ。

「……ん、あれって」

赤信号の手前で立ち止まり、信号待ちをしていると、横断歩道の向こう側に見覚えのある顔を見つけた。

吉川天満。

制服姿の彼女が、反対側に立っている。

こちらには気づいていないようだ。

「勲弥、どうしたの」

「あそこの子。あの子が、僕が昨日助けた子だよ。吉川って言うんだけどさ」

「昨日、殺されそうになった人？」

勲弥は頷く。

昨日。

あの後、勲弥は彼女を家まで送り届けた。吉川自身は一人で帰れると頑なに言い張ったが、勲弥は半ば強引に家まで送っていった。どう考えたって、吉川一人で家に帰すという判断が正しいはずがなかった。

昨日の吉川のように、理不尽にも異民による犯罪に巻き込まれてしまう人間というのは、決して少なくない。

そういう人間に対しては、記憶消去などの措置が取られることが多い。一度非日常を知ってしまった人間は、その非日常を覚えている限り、完全には日常へ回帰できないからだ。

その辺りの判断は、捜査が進んでからなされることになるだろう。それまで吉川天満の扱いは保護対象者であり、入国管理局は彼女を24時間体制で護衛する。そういう手筈になっている。

家までの道中、吉川は一言も喋らなかつた。ショックで茫然自失、というわけではなく、単純に勲弥と話することを拒んでいるように見えた。

……僕が嫌われているというよりは、吉川自身が人と関わることを拒んでいるみたいだな。

先ほどの暁美の話を踏まえて考えれば、そういう結論に至る。

吉川天満と関わりと不幸になる　その噂と、関係があるのだろうか。

……それにしても。

不思議なのは、殺されかけたにも関わらず、吉川があまりにも落ち着いていることだった。

昨夜、勲弥は最初、彼女を入国管理局の方へ連れて行こうと考えていた。見知らぬ男に襲われて、精神的ショックが大きかろうと考えたからだ。だが、吉川はそれを固辞した。

自分は大丈夫だから、と。

平然とそんなことを言つてのけたのだ。

……やっぱり、吉川には『何か』がある。

勲弥はそう考えて、局の方に吉川天満についての調査を依頼している。

ひょっとしたら彼女もまた、異世界に関わる人間なのかもしれない。

その可能性は、決してないわけではなかった。

「あつ」

一妃が声を上げる。

今度は何だ、と思つてそちらを向くと、一妃が財布を開き、中を探っていた。

落し物とはいえ人様のものを勝手に漁るのはどうかと思い、そのことを言つて聞かせるべきかとは思つたが、

「この財布、その吉川さんの財布だよ」

財布の中の学生証を見た一妃の言葉で、勲弥は言葉を失くした。

……偶然って、あるもんだな。

第三話 「偶然って、あるもんだな」(後書き)

週一くらいで更新できるよう頑張ります。

第四話 「これは、偶然なんかじゃ」

吉川天満は、己の間抜けさを呪っていた。

……財布を、失くすなんて。

どこで落としたのだろうか、と考えながら、学校まで戻る羽目になっっている。

放課後、駅前で時間を潰している最中に気がついた。財布が無ければ電車にも乗れない。

馬鹿みたいなミスだった。

……出来るだけ、学校へは戻りたくないのに。

本来であれば、学校になど行きたくはない。だが、家にいたくない以上、居場所が必要だし、高校くらいは出ておいたほうが後に役立つだろう。せつかく学費は出してくれると言っているのだから。

……居場所だなんて、笑わせる。

自嘲の笑みがこぼれる。

居場所なんて、どこにもない。家にも、学校にも、その他ありとあらゆるどの場所にも。

『あの場所』を自分の家だなどと思ったことは、一度もない。

一緒に住んでいるのは『家族』ではなく、ただの親戚だ。自分とどういう続柄にあたるのか、天満自身は知らないし、興味も無かった。

自分は『あの人たち』を家族と思っていないし、『あの人たち』

も自分を疎んでいる。世間体を気にしてのことなのか、高校には通わせてくれているし、最低限の金銭援助もある。

だが、それだけだ。

料理を作ってもらったこともないし、何かを買ってもらったこともない。

部屋が無いので、階段下の物置を部屋代わりにしている。

洗濯機を使わせてもらえないから、近くのコインランドリーを利

用している。

お風呂を使わせてもらえないから、銭湯に行ったり漫画喫茶に泊まったりしている。

あの家に、自分の居場所など無いのだ。

それが何故かを、天満は考えたことがなかった。

『あの人たち』からすれば、両親を事故で亡くした遠縁の親戚の子を押し付けられて迷惑しているというところなのだろうか。

理不尽といえば理不尽。

不幸といえば、不幸。

だが、天満はそんな自分の境遇を特別嘆いたりはしなかった。自分よりも不幸な人間なんて、この地球上にはいくらでもいるのだから、と。

毎日ちゃんとご飯を食べることが出来るだけでも、自分は幸せなのだ。

悲劇のヒロインを気取るつもりなど、毛頭ない。

……最初の頃は、あの人たちに殴られ蹴られどつかれたものだけだ。

現在では『あの人たち』は天満のことなど気にしない。空気のように扱っている。世間体だけはやたらと気にするので、表向きには天満をしっかりと養っていることにしているようだが。

天満としても、今の状況はやりやすかった。自分にかまわなくていてくれるほうが何かと楽だ。夜、家に帰らなくても何も言われずに済む。

学校でも、そのように在りたいのであるが、どうにも上手くいかない。空気のようにいたいと思っても、どうしても他人が寄ってくる。それは勿論、良い意味で、ではない。

男子はまだいいのだが、一部の根性の捻じ曲がった女子が面倒だ。自分のことなど放っておけばいいのに、何かとちょっかいを出してくる。机に落書きをされたり、上履きや体操着を隠されたり、トイレで水をかけられたこともあった。お前らは小学生か、と罵りたく

なるが、そんな気力も勿体無いと思った。彼女たちの言い分から推測するに、自分が一年生の時に男子をことごとく振っていたのがいけなかったらしい。その辺りの心情は天満には理解しかねるのだが、一言に集約すると「お前生意気」ということのようなのだ。

あまりにも馬鹿馬鹿しすぎて笑ってしまう。嫌がらせをするくらいなら、その時間と労力を他のことに費やすほうが遥かに生産的だろうに。

……財布が無いのも、あの連中の仕業なのかしら。

可能性はあるなと思いつながら、溜息交じりに、天満は来た道を戻っていく。財布が落ちていないかをチェックしつつ。

誰かが拾ってしまった可能性も、十二分にある。交番には既に行ったが、届いていなかった。そうになると、悪意ある誰かに持っていかれた可能性も否めない。

……ついてない。

不幸だ、などという台詞は、悲劇のヒロイン気取りみたいで嫌だ。だが、天満に運がないことは事実だった。

日常的に、天満は不運だった。

だが、大きな怪我を負ったり、まして死んだりということにだけは、絶対ならなかった。

車に轢かれそうになったり、上から植木鉢が落ちてきたり、階段から足を滑らせたりしても、せいぜいかすり傷を負うくらいで済んでしまう。不幸中の幸い、だった。

ラッキーなのかアンラッキーなのか分からない。

「はあ」

信号待ちをしながら、思わず溜息を漏らした。

……財布、見つかるかな。

いつも通りの不幸中の幸いが働くのであれば、何らかの形で見つかるのではないかと天満は考えている。

だからと言って、探さないわけにもいかない。無くては困るものだし、中身を抜かれたりされても面倒だ。

……我ながら、面倒臭い不運っぷりだわ。
慣れている、と言えば慣れている。だが、流石に精神的に疲れてきた。

「吉川」

いきなり、声をかけられた。

それまで俯いて考えに耽っていた天満は、ぱっと顔を上げる。
気づくと信号は青。

そして天満の目の前には、横断歩道を渡ってきたと思しき男女が二人。

どちらも、見覚えのある顔だ。

男の方は、昨日天満の命を救ってくれた、右眼が紅い少年。確か隣のクラスで、名前は各務勲弥。

女の方は、学校でも話題になっている、銀髪紅眼の美少女。一度見ただけでは忘れられないほどに鮮烈な容姿の持ち主だが、名前までは知らない。

その二人が、天満の前に立っている。

何故？

「よう」

「……こんにちは」

二人がそれぞれ挨拶をしてくる中、天満は思考する。

……昨日、私に近寄るなど言っただけなのに。
言葉だけでは理解できなかったようだ。

そもそもこの少年は、どうも不思議な力を持っているようだ。何か、天満の知らない世界に、この少年は身を投じている。昨日のような殺し合いが起こるような。

……昨日、各務君が使っていた力と、私の力は、何か関係が？
天満には、不思議な力がある。

超能力、と呼べるのかどうかは分からないが、とにかくそれは、物理法則からは外れた力だ。

その力で、天満は沢山の人間を不幸にしてきた。

……やっぱり、身体に分からせる必要があるみたいね。

「こんにちは、各務君。……私は昨日、忠告したわよね。私に近づく、不幸になるって」

「あ、ああ。その噂は聞いている。でも、噂は噂だろ。僕は……」

「火のないところに煙は立たないのよ、各務君」

そう言って、天満は、目の前に立つ勲弥の右手を、いきなり、握った。

突然のことに、勲弥も動揺を見せる。僅かに顔を赤くしているあたり、あまり女性に耐性は無いのだろうか。

「な、何だよ吉川……」

「すぐに分かるわ。私が疫病神だということが。だから……もう私に近付かないで」

そう言って手を離し、吉川は踵を返す。

早足で、その場を去る。

後ろから声が聞こえるが、気にしない。無視する。

あの少年が『不幸』になるまで、そう時間はかからないだろうか。

「……………っ、嘘だろ……………」

突然のことだった。

あまりに突然のことで、流石の勲弥もおののかずにはいられなかった。

……こんな偶然が、あるものか。

地面にへたりこんだ姿勢で、勲弥は驚愕を覚える。

息は荒く、冷や汗が頬を伝った。

「勲弥、大丈夫？」

側に立つ一妃も、少なからず驚いているようだった。

無理もない。

吉川が去ったその直後、居眠り運転のトラックが二人の元に突っ

込んできたのだから。

幸いにも、すんでのところで二人とも回避することが出来た。トラックはそのままガードレールに衝突したが、運転手も無事なようだった。

だが、一歩間違えれば死んでいたかもしれない。

「ああ、大丈夫……だけど、信じられない」

命がけの戦いというものをいくつも経験している勲弥であったが、今回は本当に動揺していた。

あまりにも予想外。

こんな事態、想定できるはずがない。

「これは、偶然なんかじゃ……」

吉川と話をした直後に、これだ。

吉川天満に関わると不幸になる。

その噂を、吉川本人が肯定したわけだが、これでは勲弥も認めざるを得ない。

「つていうか、吉川が進んで不幸にしているんじゃないのか」

吉川が突然、勲弥の右手を握った動作。あれが怪しい。

触れることで他人を不幸にする能力。

そんな能力があるのかどうかは定かではないが、しかしそうしか思えないほどに、今の事故は出来すぎだった。

……そう言えば、吉川は昨日、僕に触れようとしなかったな。

地面にへたり込んだ彼女に差し出した勲弥の手を、彼女は取らなかった。

あれは、触れれば他者を不幸にしてしまう彼女なりの、気遣いだったのだろうか。

……だとすれば。

「勲弥、あの人……敵？」

現状を冷静に把握し分析した一妃が、僅かに剣呑な語調で言う。

確かに、彼女のせいで勲弥は命の危機に晒された。それは事実だが、勲弥は首を横に振った。

「……敵じゃないよ。吉川は……疫病神なんかじゃない。あいつは、ちよつと不幸なだけさ。」

だから一妃、僕らがしなきゃいけないのは「

一息。

「あの子に財布を届けてやることだろ」

「ん。分かった」

一妃は頷き、手に持った財布をきゅつと抱きしめる。

全力で届ける。

先ほどの彼女の言葉は、冗談でも何でもない。

「行けよ、一妃。お前の全力で、あの不幸な女の子に財布を届けてやれ」

「ん」

一陣の風のごとく、一妃は駆け出す。

そのあまりの気合の入りに、勲弥は若干の不安を抱く。

……張り切りすぎて、やりすぎなきゃいいけどな。

少し焚き付けすぎたか、と反省する勲弥だった。

第五話 「私はただ」

吉川天満は、またしても自分の間抜けさを呪っていた。

……だから、財布……！

各務勲弥を遠ざけようとするあまり、本来の目的を失念してしまっていた。

お陰で、わざわざ一度通った道を逆行する羽目になっている。既に一度探した道を、だ。

……まあ、視点を変えれば、見つかることもあるかもしれない。前向きに捉えて、天満は人気の少ない道を歩いていく。

最終的に財布は見つかるはず。そういう運命になっているはずだ。ここまで来たら、焦ってもしようがない。

……とりあえず、もう一度交番に行ってみよう。

そんなことを思いつつ、天満は内心に引つかかるものを感じていた。

一人の少年の顔を思い出す。

各務勲弥。

自分の命を救ってくれた、恩人。

殺されかかっていた自分の前に颯爽と現れ。

自分を殺そうとしていた男を撃退してくれ。

そして、非現実的な戦いを前に腰を抜かした自分に、手を差し伸べてくれた人。

だが天満は、彼の手を取れなかった。

……或いは、あの時さっさと手を握って、不幸にしておくべきだったのかしら。

どちらにせよ、天満は命の恩人すらも拒絶しなければならなかった。

自分にこれ以上関われば、間違いなく勲弥はひどい不幸に見舞われるからだ。

最悪、死ぬかもしれない。

そういう光景を、天満は知っている。

……あの人も、これで懲りたでしょう。

死んではいないだろうが、それなりの目にはあっているはずだ。そういう風に、天満がした。

……これでもう、私には関わってこないはず。

内心で思っ、どこか疑問を感じた。

本当にそうなのだろうか、という疑念だ。

あの少年は。

各務勲弥という人間は。

その程度の不幸に屈する程度の人間なのだろうか。

昨日の戦いを見る限り、そうとも言い切れなかった。

……各務君は、いつもあんなことをしているのかしら。

あんな世界もあるのだな、と天満は驚きを得たものだ。どこからともなく剣が現れたり、切断されたはずの腕が再生したりと、天満の常識を覆すものばかりだった。

だが、それがどうした、というのもまた天満の感想だ。

世の中には不思議なこと、常識で測れないことが沢山ある。

知らない世界が、ある。

天満自身が持つ能力とて、他の人間からは理解されないものだ。

だから天満は、自分の持つ力を誰かに話したことはない。

他人を不幸にすることの出来る、その力。

それはきつと、誰にも理解されないものだし、理解される必要もない。少なくとも今の今まで、天満はそう思っていたのだ。

だが。

今の今になって、各務勲弥という少年への関心を抑えられない自分がいる。

誰とも関係せず。

誰にも干渉せず。

近寄る人間を拒絶し。

周囲から己を隔絶し。

そういう人生を、天満は送ってきた。

そのはずだった。

そんな自分が今、本当に久々に、他者に対して興味を抱いているのだ。

……それは、そうでしょう。

そもそも、死にそうな目に遭いながら平然としていられる自分がおかしかった。

もっと感情を、動かすべきだったのだ。

……ひょっとしたら、各務君なら、私のことを理解してくれるかもしれないかったのに。

馬鹿だなあ、と天満は俯いて呟く。

自虐的に。

自嘲的に。

自動的に。

自ずと、乾いた笑みが漏れる。

「馬鹿ね、私って……」

結局自分は、悲劇のヒロイン気取りの愚か者ではないか。

理解されないと嘆き悲しみ、自分勝手に他者を拒絶し、善意も悪意も好意も厚意もことごとく遠ざけて、勝手に孤独になっていく。

とんだお笑いものだ。

「私は……馬鹿だ」

天を仰ぐ。

清々しいほどに、真っ青な空だった。

泣きたくなるくらいに、綺麗な空だった。

「吉川天満、さん」

名前を呼ばれた。

そのことに気がついて、天満は視線を空から下げていく。

視線が地面と平行になった時、目に映りこむのは、銀髪の少女の姿だった。

さつき、勲弥と一緒にいたはずの少女が、今何故か天満の目の前にいた。

……うそ、もう追いついてきたの？

厳密には、『追いつく』という表現も正しくない。銀髪の少女は、天満の前方にいるのだから。追いつかれたのに気がつかなかった、という可能性もあるが。

いや そんな些細なことはどうだっていい。

「……っ」

目の前に立つ少女が、わざわざ自分を追ってきた。その理由は、何か。

……気づいたのかしら、私が各務君に何かをしたと。

もしそうだとしたならば、この少女は、自分をどうする気なのだろうか。

「あの……これ」

緊張する天満に対し、銀髪の少女は、財布を差し出してきた。

それは、ずっと探していた、天満の財布だった。

……この子、財布を届けに来たって言うの？

そんな馬鹿な、と天満は絶句する。

さつきまでこの少女は各務勲弥と一緒にいたのだ。ならば、彼の身に起きた不幸 恐らくは車が突っ込んでくるとか、そういう類のものだろう に巻き込まれたはず。

その後で、平然と自分に財布を届けに来るとはどういうことなのか。

何かがおかしい、と天満は猜疑心を膨らませる。

……いや。何かがおかしいのは、今に始まったことじゃない……。

昨夜、天満は常軌を逸した非日常を目にしている。そこからもう、話はおかしいのだ。

今更、なのである。

だから天満が気にするべきことは、一つだった。

……この子は私の敵なのか、否か。

理由はどうあれ、天満に害をなすのであれば、こちらもそれなりの対応を取らねばならない。

勲弥は天満に対して敵意は無かった。だが、この少女もそうだとはい限らない。

……私が欲しいのは、無関心だけよ。

天満に向けられる、ありとあらゆる感情は、天満にとっては歓迎されざるものだ。

自分のことなど、いないものとして扱ってくれればいい。

そうすれば、誰一人不幸にならずに済む。

「……落し物」

天満が反応を返さないことに不安を覚えたのか、銀髪の少女は伏し目がちに言う。

そんな拳動を見て、天満は警戒のレベルを若干下げた。

……私が考えすぎてるだけかしら。

さつさと財布だけ受け取って、この場を去るのが最善か。

「……わざわざ申し訳無かったわね。あなた、名前は？」

「一妃。園崎一妃」

「そう、園崎さん。財布、届けてくれてありがとう」

天満は、少女　一妃から財布を受け取る。

一妃の手には、触れない。

今のところ、彼女に牙を剥く理由も無い。ここで彼女に痛い目を見せたところで、利益は無い。

むしろ、今度は各務勲弥の敵意を招きかねない。

それは、危険だ。

……各務君が私から遠ざかってくれれば、それでいいのだけれど。これ以上、あの少年が自分に関わって欲しくない。

「それじゃ」

そう言って、天満は一妃の横を通り過ぎる。

そこから先は、早足だ。一刻も早くこの場を去りたかった。

本当は、一妃に聞きたいことがあった。だが、それを聞いている

間さえ惜しかった。

とにかく立ち去りたいという、焦燥感にも似た願望があった。
小走りに、天満は一妃から離れていく。

「待って」

後ろから声が聞こえる。

が、無視する。

もうこれ以上関わりたくない。

名前を聞いたのは、万が一彼女が敵であつた場合に備えてだ。それ以上の意味は無い。

これから先、お互い関知せずに生きていけることが、最も望ましいのだ。

気づけば、天満は走っていた。

自分でも、何故こんなに必死なのかわからない。

……私はただ……。

「待って」

声が。

前から、した。

「……っ!？」

天満は、急ブレーキを踏んだ。

それでも止まりきれず、危うくつんのめって転ぶところだったが、ぎりぎりですみとどまる。

目と鼻の先には、園崎一妃が立っていた。

つい先ほど、天満が追い抜かした、園崎一妃その人が、だ。

「嘘、でしょ」

「どうして逃げるの？」

透き通るような紅の眼で、こちらをじっと見てくる一妃。
まるで見透かされるような感覚。

気持ちが悪い。

「やましいこと、あるの？」

「……っ、やましいことなんて！ 私は、私はただ……っ」

いけない、と天満は思った。

何も言うべきではない。自分がすべきことは、とにかくこの場を去ることだ。

そして誰とも関わらない。それでいい。

天満は奥歯を噛み締めながら、踵を返す。

そこに、園崎一妃が立っていた。

「は……………」

何が何だか、分からなかった。

慌てて後ろを振り向くと、そこにも園崎一妃の姿がある。

視線を前に戻すと、やはり園崎一妃。

「ふ、たり……………」

「ねえ、どうして逃げるの？」

園崎一妃が　どっちは分からないが　言う。

それはまるで問い詰めるように。

それはまるで追い詰めるように。

淡々と　言葉を並べる。

「後ろめたいことがあるの？」

「あなたは、私たちの敵なの？」

前から。

後ろから。

言葉が、やって来る。

「あ、あなたは……………」

前を向いても後ろを向いても、同じ人間の姿がある。

何度も何度も前後を振り返ってみるも、何も変わらない。

園崎一妃が　二人いる。

気味が悪くて、吐き気すら催す。

「ど、どいてっ！」

迷った末、天満が下した判断は、前方の一人を突き飛ばして逃走、
というものだった。

走る。

全身全霊で。

無我夢中で。

全力疾走、した。

後ろは決して振り返らない。銀髪の少女が二人、追いかけてくる

そんな光景を想像するだけで、心が折れそうだった。

両足が悲鳴を上げつつあるが、それでも走る。

曲がり角を、ほぼ減速無しで、曲がる。

そして。

角を曲がった先に立つ園崎一妃の姿を視認した瞬間。

天満は 逃走を諦めた。

「う……っ」

慣性を制御しきれず、天満の身体は前方に思い切り倒れこむ。

逃げなければ、と思う一方で、身体は言うことを聞いてくれない。

「ねえ」

「あなたは どうして 逃げるの？」

「あなたは 勲弥に 何をしたの？」

「あなたは 私たちの 世界の 敵なの？」

声がする。

前から後ろから右から左から。

眼を閉じて、聞こえてくる。

「やめて」

天満は耳をふさぐ。

それでも声が、聞こえてくるような気がした。

「もう……やめて……。私は……」

涙声になりながら、天満は言葉を搾り出した。

その言葉は、誰にも届かない。

……私はただ、もう誰も不幸にしたいくないって……それだけなの
に。

意識が、途絶えた。

第六話 「そもそも、世界っていつのは」

天満が眼を覚ますと、ベッドに寝かされていることに気づいた。身を起こし、周囲を見回してみる。

白いベッドが幾つも並んでいて、白い壁と天井に囲まれていて、ほのかに薬品の香りがする。

「医務室かしら……」

記憶を探る。

一体何がどうなって、今自分はこうしているのだったか。

だが天満の思考は、医務室に入ってきた人物によって打ち切られる。

「お、眼が覚めたのか、吉川」

入ってきたのは、各務勲弥だった。

紅い右眼を持つ少年。

「よく眠ってたな。疲れてたんじゃないか。ほら、これ」

勲弥はベッドの傍の椅子に座ると、スポーツドリンクの入ったペットボトルを手渡してきた。

少し迷ったが、喉が渴いていることは確かなので、貰っておくことにする。

フタを開けて、一気に半分ほど飲んだ。

「ありがとう。ここは、どこ？」

「んーと、概念省庁舎の医務室なんだけど……」

「……概念、何ですって？」

「ま、そうなるよな。まあ、その辺りも含めてあとで説明するとして……」

まずは、謝る。すまなかった」

唐突に、勲弥は頭を下げた。

いきなり謝罪をされて、天満は少しばかり面食らう。

まだ記憶の整理が済んでいないのだ。何故謝られなければいけない

いのが分からない。

そこで少しばかり記憶を辿ると、一つのことには思い当たった。

……私は、そうだ、あの子……園崎一妃って子に……。

銀髪紅眼の少女を思い出し、天満は背筋に走る寒気を感じた。

「一妃は、幼いっていうか、ちょっと純粹無垢すぎるころがあつてさ。融通が利かないっていうか……。僕もまさか、一妃があそこまでするとは思ってなかった。保護者として謝らせてくれ。申し訳なかった」

そう言つて勲弥は、再び頭を下げる。

「……別に、いいわ。謝罪よりも……私は説明が欲しい」
思い出す。

園崎一妃が、何人も何人も天満の前に現れたことを。

彼女は、確かに一人ではなかった。信じられないことだが、本当にそうだったのだ。

「昨夜の戦いのことも、あの一妃って子が何者なのかも。」

各務君……あなたが関わっている世界のことを、私に説明して頂戴」

無関心を貫いている場合ではない。

関心を拒絶している場合でもない。

今、天満がしなければならぬことは、知ることだ。

だから。

「各務君。私があなたにしたこと、謝るわ。申し開きのしようもないし、謝つて済むことでもないけれど……本当にごめんなさい」

今度は、天満が頭を下げる番だった。

元を辿れば、天満の行動が発端だったのだ。

勲弥に害をなしたから、園崎一妃は、追ってきた。

故に、今ここで謝らなければいけない人間は、勲弥ではなく、天満だった。

「それじゃあ、僕のところに居眠り運転のトラックが突っ込んできたのは」

「ええ。私の力によるものよ」

「それじゃあ、僕に友達がないのも」

「それは私のせいじゃないわ」

切り捨てた。

「……ま、まあ冗談はさておき」

本当に冗談だったのか怪しいものであるが、天満は触れないでおくことにした。

「じゃあ、分かった。僕の方から、色々と説明を。」

その後で……聞かせてくれ、吉川。吉川が持っている力の話を。

『私は死なない』っていう、あの言葉の意味を」

「ええ」

天満は頷いた。

「そもそも、世界っていうのは一つじゃないんだ」

そんな切り口で以って、勲弥は『説明』を始めた。

それはかつて、まだ勲弥が『他の世界』を知らなかった頃、してもらった説明と同じだ。

「『世界』っていう言葉も意味が広いわけだけど、この話で言う『世界』は、まあ、宇宙って言い換えてもいい。で、僕たちが今いるこの『世界』、この宇宙の他にも、異なる世界　異世界が無数に存在している。分かりづらければ……国みたいなものだと思うてくれれば」

そしてその異世界は、それぞれの世界が異なる法則を有している。

この世界における法則は、あくまでこの世界固有のものなのだ。

「……例えば、この世界じゃ光は直進するけど、そうじゃない世界もあるかもしれない。そういう風に、異なる法則、異なる概念で動いている世界があるって訳」

「それじゃあ、各務君やあの……『狩人』とか言ったかしら、あの人が使っていた不思議な技は、そういう『異世界の法則』によるも

のだということ?」

天満の問いに対し、勲弥は頷く。

かつての勲弥と異なる点は、天満は『異世界の力』らしきものを持つているらしいところだ。

そのお陰か、話も通りやすい。単純に吉川の頭が良いこともあるのだろうが。

「そういう、世界の法則を操ってしまう術を、『概念術』と呼ぶ。そしてその概念術を扱う人間を『概念術師』と呼んでいる。僕も一妃も、概念術師なんだよ」

より正確に言えば、概念術は、『法則』というよりも、『概念』そのものに干渉してしまう技術体系のことである。

有り体に言ってしまうえば、概念術とは魔法だ。奇跡の業だ。他の世界の法則、他の世界の概念を引き出すことで、普通では起こり得ないことまで起こせる。

「例えば、僕や一妃は『全一世界』って世界の法則に基づいた概念術を使うから、『全一体系概念術師』っていう肩書きを持つてる」「世界には名前があるの?」

まあね、と勲弥は頷く。

その世界が持つ特徴に基づき、世界はそれぞれの名を持つ。

誰かが名付けると決まっている訳でもないが、少なくとも他世界との交流を持つ技術のある世界ならば、名前は必ず持っている。識別のためには、世界の名前は欠かせないからだ。

「例えばこの世界は、他のどの世界よりも物理法則が安定しているから、『理法世界』と呼ばれてるよ」

「それじゃあ、この世界『理法世界』では、どうして概念術が存在していないの? この世界だってこの世界の法則を持つのだから、概念術があるんじゃないの? 『理法体系概念術』とでも呼ぶのかしら、この場合は」

「吉川、それはいい質問だぜ」

本当に理解が早くて、話しやすい。

自分の時はこうは行かなかつたよな、と勲弥は内心で苦笑する。

「さつき、この世界の物理法則はどの世界よりも安定してる、って言ったよな。だから『理法世界』っていう名前がついたことも」

「ええ」

「なんて言うのかな、この世界の物理法則って、一番『理に適ってる』んだよ。隙が無いって言うのかな。説明されていない部分があるにしても、出来すぎなくらいに上手く出来てるだろ、この世界ってさ」

無数に存在する歯車が、全てめれなくきつちりと噛み合っている、という感覚だ。

当たり前のことのように思えるが、実はそうでもない。他の世界の法則は、この世界の法則ほど整理整頓されていないのだ。

「他の世界は、そこまで完璧な法則じゃない。矛盾とか綻びを抱えていたりするものなんだ。」

逆にだからこそ、概念術の発達する隙があつたんだよ」

改変する余地がある程度に未熟な法則だからこそ、概念術という技術が発達した。

この世界の法則は、人間ごときが付け入る余地が無いほどに、出来たものだつたのだ。

「だから、『理法体系概念術』は未だに存在しない。まあ、他の体系の概念術をアレンジするくらいが関の山だよ」

「……分かるような、分からないような」

「うん、そんなもんだと思うぜ。実際、僕もよく分かってない。なんとなく、理解しておいてくれればそれで」

勲弥が語った理屈は、実のところ、完全なものではない。

概念術に関しても、その原理が全て説明されているわけではなく、大まかな論理でしか語られないのが実状だ。

「それで、だ」

勲弥は一度仕切りを入れる。

「そついう、この世界とは全然違う世界がいくつもあって、そして

世界同士は交流を持つ。

それは、この『理法世界』ですら例外じゃない」

「でも、そんなこと、全然知られていないわよね。この世界に概念術が無いことは分かったけど、異世界の存在が全く知られていないのは別問題のはずよ」

「そこなんだよ。この世界……っていうか、この地球上に住む人間の殆どは、異世界の存在を認識してない。知らないんだ」

言って、勲弥は昔のことを思い出す。

即ち、異世界の存在を知らずに生きていた頃を。

そして、今を思う。異世界の存在を知り、概念術の存在を知り、そして異民との戦いに身を投じる現在を。

……どっちが良かったかなんて。

比べても仕方が無いな、と思う一方、吉川がどう思っているのか、という問題もある。

知らないほうがいいことも、ある。

だが、何も知らないまま理不尽を受け入れると言うことなど、出来ない。

自分は知っている。

そして、知りたいと望む人間がいる。

ならば、伝えるのが己の義務ではないのか。

……でも、言葉は選ばなきゃな。

肝に銘じつつ、勲弥は続ける。

「色んな世界が、異世界間交流で文明を発達させてきた中で、この世界だけは他の世界との関わりを殆ど持たず、独自の文明を築いてきた。この世界法則に従った技術を発達させてな。

そして他の世界も、中々この世界を見つけることが出来なかった。それが何でかは知らないけどな」

日本概念省の公式記録では、異世界と初めて交流を持ったのは20世紀前半とのことだった。

それ以前に異世界との接触があった可能性は勿論あるが、少なく

とも『公式』ではそういうことになっている。

「……異世界の存在を知ったごく一部の人たちは、異世界の技術を手に入れたわけだけど、それを公にすることはなかった」

「それは、どうして？」

「その技術が、この世界に合ってなかったから、らしい」

身の丈に合わない技術は身を滅ぼす。

この世界にはこの世界の法則があり、それに従って作られてきた技術があり、文明がある。

異世界の技術はそれに合わない、そぐわないものだった。だから広めることはしなかった、ということなのだそうだ。

勲弥にも分かる。異世界の技術　概念術などは、きっとこの世界の人間には扱いきれない。

もしも概念術が広まれば、この世界の在り様は激変することになる。その過程で争いも起きるかも知れない。

「SFなんかでよくある、未開惑星保護条約、みたいな感じがしら」
「そうそう、そんな感じだよ。だからこの世界じゃ、異世界との交流は限定されてる」

「隔絶、ではないのね」

「鎖国するわけじゃないからな。それに、どうしたって侵入は防ぎきれない。昨日の男……ロベルト・ブラックだって、不法侵入者なわけだし。」

それでも異世界の人間　異民の出入りを管理して、他世界の技術がこの世界に混乱を及ぼすことを防ごうっていう組織が、概念省・入国管理局ってわけ」

「その概念省という組織は、どういう組織なの？　省ということは、中央省庁の一つってこと？」

「それは……」

「そこからは、私が説明させてもらうわね」
声。

勲弥が医務室の入り口の方を見ると、そこに声の主が立っていた。

黒髪の、スーツを着た若い女性だ。

「美冴さん」

勲弥は女性の名を呼ぶ。

「お疲れ様、勲弥君。それから、はじめまして、吉川天満さん。

私は園崎美冴そのさきみさえ。よろしくね」

つかつかと歩いてきた美冴は、勲弥の傍に立ち、天満に笑顔を向ける。

「……初めまして。あの、園崎って……」

「お察しの通り、一妃は私の娘よ。まあ、義理の、だけど。

このたびは娘が迷惑をかけてしまったわね。本当にごめんなさい」
頭を下げる美冴に対し、天満は首を横に振った。

「元はと言えば私の行動が原因です。頭を上げてください。ところで、あの子は今？」

「一妃なら、別室で反省中よ。あとでちゃんと謝罪をさせるから、その時また改めて、ね」

天満は頷いた。

「美冴さん、いきなり現れてなんだよ。説明なら僕がちゃんとするけど……」

「吉川さんは重要人物なのよ、勲弥君。今回の事件に巻き込んでしまった以上、しかるべき措置を取る責任がこっちにはあるの。下っ端の勲弥君には荷が重いわね」

笑いながら勲弥の頭をぽんぽん叩いてくる美冴。

その手を振り払い、勲弥は美冴の顔を見据える。

「しかるべき措置、って何だよ。まさか、吉川の記憶を消すつもりじゃ」

「はい、おだまり」

デコピン。

美冴の中指が、恐るべき威力を持って勲弥の額を打ち抜いた。

勲弥は椅子から床に倒れこみ、しばし痛みに悶絶する。

園崎美冴のデコピンといえば、入国管理局でも恐れられる代物で

ある　そんな事実を思い出す勲弥だった。

「吉川さん、体調は平気かしら。もしよければ、場所を移して、改めてお話をさせてもらいんだけど……」

「大丈夫です。話というのは……？」

「まあ、色々なことについて、よ。吉川さんとしても聞きたいことは色々あるでしょう？　大丈夫、あまり硬くならないでいいからね？　お茶とお菓子を食べながら、気軽に話しましょう。……ほら、勲弥君、いつまで床に寝てるの。男の子ならさっさと起きなさい」

勲弥は額をおさえながら、ゆっくりと身を起こす。

軽く脳震盪を起こすところだった。

だが、いいこともあった。

「勲弥君、顔がニヤついてるけど、どうしたの？」

「いや、美冴さん、そういう下着も履くんだと思って　」

二発目が、容赦なくぶちこまれた。

第六話 「そもそも、世界っていつのは」(後書き)

世界観説明！。

ホントに難しいなー、こーいうの。

感想・評価お待ちしております。

第七話 「友達がいらないんじゃない」

日本概念省・入国管理局。

局長室。

「平たく言っちゃえば、概念省つてのは異世界の存在が広まらないようにあるもんだと言ってもいい」

部屋の奥、窓際に置かれた机。

男が机の上に足を投げ出す形で座っている。

スーツを着崩した黒髪の男で、鋭い目つきが特徴的だ。

机の上には『局長 賀持諒助^{かもちりょうすけ}』と書かれた札が置いてある。

「他の世界と大きく異なる形を持つこの世界の、その在り様を守ろうと、そういう理念で作られた組織なわけだ。……分かるか、一妃？」

そして、男 賀持の向かい側。

局長室のど真ん中の床に、正座をしている少女がいる。

銀髪紅眼の少女 園崎一妃は、少しばかり不満げな表情を浮かべながら、それでもぴしつと正座を続けている。

背筋をぴんと伸ばし、身体が揺れたりもしない。まるで何かで固定されているかのような、この上なく完成された正座の姿勢だった。「実際に動くことが一番多いのは俺たち入国管理局だが、それにしただって概念術を使う機会は極力少なくしているし、事件に巻き込まれた一般人に対しても色々と措置をしているわけ。分かる？」

概念省って組織はそれ自体が日本という国家の最重要機密であり、それ故に非公式機関なの。知られちゃまずいことばっかなわけよ。故に職員には徹底した情報管理が求められる。

今回のお前の行動は、完全にやり過ぎ、だ」

「……ごめんなさい」

一妃は頭を下げてそう言ったが、しかし納得をしたようには見えない。

それなりの理由があつたことが窺い知れる。

「一応聞いとくか、一妃。何故あそこで力を？」

「そうしないといけないと思ったから。勲弥は違うって言ったけど、やっぱり吉川天満は、私たちの敵なんじゃないかって思った」

「私たち、ね」

つまりは、園崎一妃と、各務勲弥。

『全一世界』を継ぐ者たちだ。

園崎一妃という少女は、『全一世界』に牙を剥く人間に対して、容赦が無い。彼女を完全に制御できるのは、勲弥くらいのものだろう。

否 勲弥ですら制御しきれないことがあると、今回で分かった。勲弥に危険が迫れば、彼女は誰にも止められないのだ。

そして、園崎一妃が本気を出した時、それに立ち向かえる概念術師が、どれほどいることが。

「……吉川天満についてはこっちでも調査してる。何にせよ、お前の先走りには違いねえよ。

言ってもしょうがないかもしれないが、お前はもうちょっと落ち着き持て。今回にしたって、目撃者がいなくてラッキーだったんだからな」

誰かに見られていたら、もっと面倒な事態になっていたことは疑いようが無い。

「とにかく以後気をつけるように……。というか、俺の仕事を増やすな頼むから」

男は、大きく溜息をつく。

園崎一妃は、とにかく子供だ。常識知らずもいいところだし、学ぶべきことは山ほどある。

厄介なのは、そんな子供が、強大すぎる力を有しているところだ。

「……分かった。ごめんなさい、かもちー」

幸い、一妃の性格は悪くない。言って聞かせれば反省できるのは良いことだ。頭もいいし、教えればその分吸収していく。

「結構。じきにお迎えが来るから、そしたら行つてよろしい」
言つた直後、局長室のドアをノックする音が響く。

恐らくは『迎え』だろう。賀持は一妃に言つて、ドアを開けさせた。

予想通り。入つてきたのは一妃の保護者 各務勲弥だった。

「局長、一妃を迎えに来た」

「知ってるよ。お説教は終わったからさっさと連れてけ」

「いや、僕もあんたに聞きたいことがあるんだ」

そう言つて勲弥は、机の前まで歩いてくる。

「美冴さんが吉川連れてどっか行つたんだけど。『男子禁制ね』つて笑顔で言われた」

「そりやまた。でもまあ、お前よか美冴ちゃんの方が色々とは話は早いでしょ」

「吉川は、もう元の日常には戻れない。そういう意味か」

吉川天満には、世界にまつわる様々な説明がなされるはずだ。

これは滅多にないケースだ。この世界の人間が異民絡みの犯罪に巻き込まれた場合、大抵の場合は記憶処理を施す。異世界の存在、概念術のテクノロジーの流入・拡散を防止するためだ。

とは言え、全ての人間がそうではない。元の日常に回帰することが難しい場合などは、そのまま何らかの形で概念省の管理下に入る。勲弥はまさにそのケースに当てはまる。彼はつい一年ほど前まで一般人だったのだが、ある事件をきっかけに、入国管理局に入り、実働として働いている。

吉川天満もまた、そういったレアケースなのだ。

「勲弥。勘違いしているようだから言っておくけど、彼女の場合はお前とは違う。

あとから力を手に入れたお前と違って、吉川天満は最初から力を持つてる。彼女の『元の日常』ってのは、お前が言つのは意味が違つてくるぜ」

「じゃあ、吉川は……」

「簡易検査の結果、何らかの能力を秘めていることは確定的だ。それが先天的なものなのか、植えつけられたもののかは分からないけどな。もうちょい調べる必要はあるだろ」

「吉川の命が狙われたのも、そういう事情があったからなのか……」
『狩人』 ロベルト・ブラックによる吉川天満襲撃。

彼女の持つ力を疎んでのことなのは推測に難くない。問題なのは、それが誰の意図なのか、だ。

ロベルト・ブラックの私怨なのか。

或いは、その背後にいる『誰か』の意思なのか。

前者ならば話は単純だ。ロベルト・ブラックを捕まえて事情聴取すれば大体は片付く。

だが、後者であった場合。この事件は一筋縄ではいかないものとなるだろう。

「……何にせよ捜査は始まって。多分だけど、勲弥、お前は一妃と一緒に、吉川天満の護衛に当たってもらうことになるな」

「言われなくても。むしろ僕の方からそう進言しようと思ったくらいだ」

「言うねえ。一妃の話じゃ、殺されそうになったらしいじゃん、お前。だのに、何でまた？」

賀持はからかうように笑ってみせる。

勲弥は結構なお人よしだ。時としてそれが仇となることもなりうるが、彼の最大の長所であることには違いない。一年前の事件で、賀持は彼のそういった性質を実感している。

危険なのは。

最大の長所が最大の短所に転じうる、ということころなのだが。

「何か、放っておけないし。それに……」

「それに？」

「友達がいらないというところに親近感を感じます」

「嫌な類友だなオイ……」

各務勲弥は友達が少ない。

ルックスも性格も悪くない。何か他人を遠ざけてしまう悪因を持つでもないのに、何故か彼は友達が全然いないらしい。

聞くところによれば、学校では一妃と、あとは幼馴染の女子しか話さないそうだ。

吉川天満は、誰とも話さず、孤独な高校生活を営んでいるそうだが、そちらにはまた別の事情がありそうである。

と、そこで、一妃が口を挟んでくる。

「かもちー、勲弥は友達がいないんじゃないかと、作らないだけなんだよ。勲弥が自分で言ってた。友人は量じゃなく質だって」

あくまで一妃に他意はない。それくらいは賀持にも分かる。

だが現実、勲弥は気まずそうな表情をして、滝のような汗を流していた。

「ちょ、一妃」

「勲弥は休み時間はいつも一人でいるんだけど、それはうるさいのが苦手なだけなんだよ。」

あと、グループ活動をする時とかは暁美以外に声をかけてくれる人がいないんだけど、それは勲弥が一人でいるのが気楽だからなの。勲弥は『一匹狼』なんだよ」

「ほーお」

賀持はニヤニヤ笑みを浮かべながら、焦燥の表情を浮かべる勲弥を見やる。

ぶっちゃけ、面白くて仕方が無い。

「何だよ勲弥、随分と良い台詞吐くじゃねえの」

賀持がからかうと、勲弥はばつの悪そうな顔で反駁する。

「い、いいだろ別にっ。友達いなくても困ることなんか無いんだし。それに……」

勲弥は一旦言葉を切った。

表情が真剣なものになったのを見て、賀持はニヤニヤ笑いを止める。

「……僕はいつ死ぬか分からないじゃないか。だから……」

「お前が死んだ時、悲しむ人間は少ない方がいいってか」
「……………」

勲弥は何も言わない。それを見て、賀持は大きく溜息を吐き出した。

途方も無いレベルのお人よしがいたものである。

「そういうモンこそ量じゃなくて質だと、俺は思っけど?」

「……………それは、どういう」

「人数の話じゃねえ、ってことだよ。お前がぼっちだろうがそうでなかつても、お前が死ねば誰かが悲しむのは同じだ。数字に意味はねえよ」

勲弥には家族もいる。少ないかもしれないが友人もいる。そして仲間がいる。

勲弥が死ねば悲しむ人間は、いるのだ。

流れる涙が多かるうが少なかるうが。

人の死の価値は同等だ。

「ったく。下らねえこと考えやがって。ガキは後先考えずやんちゃしてりゃいいんだよ」

「そういうわけには……………」

「うるせえ。お前が変な遠慮をしたところで喜ぶ人間はいねえよ。

お前のそれは自己満足に過ぎない」

「っ……………」

勲弥は押し黙る。

彼自身も分かっているのだろう。自分の言っていることがどうしようもなく欺瞞であると。

「話は簡単だろうが。お前が死ななきゃそれでいい。いつ死ぬかも分からない、なんて年寄りの考えることだ。分かったか? 分かったらさっさと出てけ。俺は忙しい」

「……………邪魔した」

勲弥は一妃を連れて、局長室を出て行った。

少しばかり思いつめたような表情をしていたが、大丈夫だろうか。

……まあ、俺が心配するようなことでもないけど。

大いに悩めばいいのだ、と思ってしまふのは年寄りくさいかもしれない。

……案外、勲弥と吉川天満は似た者同士なのかもな。

吉川天満もまた、孤独を自ら望んでいる節があるようだ。

それは、彼女がその身に宿した『力』と関係があるのだろうか。

他人を遠ざけ、一人でいなければならぬほどに、その『力』は厄介だということか。

「推測しか出来ねえ、か」
吐息。

とにかく今は、情報が必要だ。

何となく、賀持は感じていた。この事件がただならぬ事態に発展しそうだという、予感を。

或いは 悪寒を。

第七話 「友達がいないんじゃない」(後書き)

感想・評価お待ちしております。

第八話 「守ってくれるんでしょう」

夜になって、吉川の帰宅許可が下りた。

彼女を家まで送り届ける役目は、前回同様、勲弥が担うことになった。

今度は、吉川は何も言わなかった。前回は、拒否されたわけだけれど（それでも勲弥は強引に彼女を送り届けたが）。

何か心境の変化があったのかな、と勲弥は推測する。

美冴から色々な話を聞いて、彼女は今、軽く混乱していることだろう。

はつきり言つて、途方も無い話だ。異世界だの概念術だの聞きなれないファンタジー用語のオンパレードと来ている。かつて勲弥も適応するにはそれなりの時間を要した。

……まあそういう説明をするのは、美冴さんは抜群に上手いからなあ。

自分などよりも上手く、話をしてくれたことだろう。

だから、今心配なのは、吉川がこれからどうなるのか、だ。

彼女がどのような力を持っているのか、まだ分からない。だが、その力を狙う輩がいることは間違いないのだ。『狩人』ロベルト・ブラックがまた襲ってくるかも知れない。

とにかく今は、吉川を護衛することに専念するしかない。勲弥はそう感じていた。

入国管理局の情報課は既に彼女にまつわる情報収集を進めているそうだし、ロベルト・ブラックの行方も追っている。事件の全容も次第に明らかになっていくはずだ。

今は自分に出来ることを全力でやるしかない。

そして勲弥に出来るのは、戦うことだ。

吉川天満に害なす敵と戦って、彼女を守ることだ。

「……各務君、今日は本当にごめんなさい」

概念省庁舎を出た後。

二人で夜の街を歩いている時、吉川は、謝罪してきた。それまでずっと黙っていた吉川が急に謝ってきたので、勲弥は少しばかり面食らう。

「恩を仇で返すような真似をしたわ。謝って許してもらえとは思っていないけれど……本当にごめんなさい」

そう言って吉川は頭を下げる。

「……いいよ、気にしてない。頭を上げてくれよ。それより、こっちこそ悪かったな。一妃がやりすぎたみたいで」

「それも元はと言えば私のせいだもの。自業自得よ」

あの後、勲弥は一妃に直接謝罪をさせた。

吉川は許してはくれたが、一妃に対して恐怖を感じてはいるようだ。

無理も無い。

吉川からすれば、得体の知れない存在だろう。

彼女と関わりの深い勲弥でさえ、園崎一妃という存在を完全には理解しきれていないのだ。

「ところで各務君は、あの……園崎一妃さんとは、どういう関係なのかしら」

不意に、吉川がそんなことを聞いてきた。

勲弥はどう答えるべきか迷い、頭を掻く。

「あー、うん。どう言えばいいのかな。とりあえず、僕は一妃の保護者なんだけど。まあ、法的には美冴さんが保護者で、一妃は美冴さんの養子ってことになってる」

「あの子、何者なの？」

聞きたいことはそういうことではない、とでも言わんばかりに、吉川は質問をより具体的なものにしてきた。

より、核心に迫る問い。

園崎一妃は、何者なのか。

園崎一妃は、何物なのか。

「あの子は……人間なの？」

「人間だよ。それは……変わらない。僕や吉川と同じ……人間だ。ただ、僕らとは少し違うところがあるのは認めるよ」

『全一世界』の遺産。

その全貌は、『全一世界』が滅びた今、明かされることはないのだろう。

「一妃は、これからもっと人間らしくなっていくんだ。今までは、あの子の生まれとか、『全一世界』を取り巻く事情とかがあって、普通の人間らしい生活なんて出来なかったんだけど。でも今は違う。学校に通って、友達を作って、人間らしい日常を過ごせるはずなんだよ」

園崎一妃がごく普通の人間らしい日々を送ること。それこそが勲弥の望みなのだ。

だからこそ、一妃には戦って欲しくない。

勲弥の希望に反し、一妃はどこか好戦的などころがあるのが、悩みのである。

「……だから、あの子のことは普通の人間として見てやってくれないか。今日のこと、怖い思いをして、あまり良い感情を抱けないかもしれないけど。それでも、一妃を嫌わないでやってくれ。一人の人間として扱ってやってくれ。頼むよ。虫のいい願いだったのは分かっているけど……」

「随分と、熱心なのね。それだけ一妃さんのことが大事なのかしら」

「まあ、な。色々、責任とかあるんだよ」

これから一生、勲弥は一妃の面倒を見なければならぬ。

彼女を、守らなければならない。

それが勲弥の背負った義務であり責任だ。

「……分かったわ。正直言えば、未だにあの子に対する恐怖はあるけれど……努力はする。」

それに、人外じみた力を持つのは私も一緒。ある意味、同じ穴の貉よね」

自らに嘲笑を向ける吉川。

そういえば、と勲弥は思い出す。

先ほど、美冴が割って入ったお陰で、話が中断していたのだった。「なあ吉川。さっき聞きそびれちゃったから、今度こそ聞かせてくれよ。お前は一体、どんな力を持っているんだ」

信号待ちに立ち止まったところで、勲弥はそう切り出した。

「……そうね。話す義務があるわね。私もあなたと美冴さんに話を聞かせてもらったわけだし」

そう言つて、吉川は自身の前髪をそつと払った。

その仕草に、一瞬、どきつとする。

吉川天満は、学年でも話題になるほどの美人であるということを、今になって勲弥は思い出した。

長くて目にかかつてしまっている前髪が鬱陶しくて払っただけなのだろうに、それだけのことに反応してしまう。男子とは不思議な生き物だ。

……う。よく見ると、吉川って結構胸でかい。

気づいてしまった。ブレザーの下からでも分かるほどに自己主張している、二つの膨らみに。

こうなってしまうと、もうそこにしか視線がいなくなる。つくづく男子とは奇妙な生き物である。

……まずい。女子は視線に敏感と聞く。

男子はバレていないと思っけていても、じろじろ見ていることに女子は意外と気づいているものなのだ。

勲弥はかつて幼馴染にそう忠告された。その教訓が今ここで生きる。

目を逸らさなければ。

「……各務君。先ほどから視線がいやらしいわよ。どこを見ているの」

「バレてた!」

とつくに手遅れだったらしい。

女子の感覚を侮っていたのが敗因といえよう。

「どうして男の人って、大きな胸が好きなの？　こんなの、ただの脂肪の塊でしょう？　正直言って、邪魔なんだけど」

そう言って吉川は腕を組む。まるで大きな胸を強調するかのよう
に。

恐らく、吉川にそんなつもりはないのだろう。ないのだろうが、
結果として、よりセクシーなポーズになってしまい、勲弥の視線を
集めてしまう。

「ねえ、どうなの各務君。脂肪の塊に欲情するのってどんな気持ち
？」

「み、身も蓋もないことを言うなよ。問題なのは材質じゃないよ。
僕ら人間だって、そういう括りで見れば蛋白質の塊になっちゃうわ
けだろ」

「なるほど。それもそうね」

吉川は納得したようで、腕を解いた。

それから勲弥の方を向いて、胸を張って、

「……触ってみる？」

などと爆弾発言を投下した。

「え、いいの！？　い、いや待て！　流石にそれはまずかろう！」

「半分本音が漏れ出たわね……いやらしい」

吉川の半目を受け、勲弥は己の失策を悟る。

今のは畏か。

だが、男はそういう生き物なのだ。致し方ない。

「……まあ、各務君は命の恩人だし。それくらいの役得はあっても
いいんじゃないか、とは思ったけれど。だから、何か私にしてほし
いことがあれば言って頂戴」

「別に……そこで恩返しなんてしてもらう必要は。そんな、恩義と
か感じなくていいからな」

「それもそうね」

「おい」

「冗談よ、冗談」

そう言って吉川は、一歩先を歩いて行ってしまう。
何を考えているのか、今ひとつよく分からない。

しかしこうして話してみると、想像していたよりずっと話しやすい女の子であることは分かる。

「……少し落ち着いた場所に行きましょうか。長くなるかも、しれないから。各務君、時間は平気かしら」

「あ、ああ。大丈夫だけど」

「そう。じゃあ、適当なお店に入りましょう」

言って、吉川は周辺をきよるきよると見回す。

喫茶店なりファーストフード店なりを探しているのだろう。

「なあ、吉川こそ時間は大丈夫なのか。もう九時回ってる。家族が心配するんじゃない……」

「平気よ」

吉川は、断言した。

過剰なまでに、強く。

「帰りが遅くなったところで、心配するような家族はいないから。それに……」

吉川は勲弥の方を見て、ほんの少し、口元を緩める。

「各務君が、守ってくれるんでしょう？」

その笑みに、勲弥は心臓を鷲掴みにされたような感覚を得た。

可愛い、と。

綺麗だ、と。

思わされた。

……僕って結構単純な奴なのかもな。

今が夜でよかった、と勲弥は安堵する。

明るかったら、顔が赤くなっているのが気づかれてしまうかもしれないから。

第八話 「守ってくれるんでしょう」(後書き)

感想・評価お待ちしております。

第九話 「私は、疫病神なのよ」

勲弥と吉川は、近くにあった古びた小さい喫茶店に入った。

時間が時間だけに、客は自分たちだけだった。果たして自分たちは今日何人目の客なのだろう、と要らぬ想像をしまいくらいに、賑やかさとはかけ離れた店だった。

隅っこの席に座って、注文を取りに来た店主と思しき男にコーヒーを注文する。

無愛想な男がコーヒーを二杯運んできた後で、カウンターの奥で新聞を広げ始める。それを確認してから、吉川は話を始めた。

「私は、人間を不幸に出来るのよ。意図的にいきなり、とんでもないことを言い始めた。

意図的に、人間を不幸に出来る。

それが具体的にどういう意味を持つのか、すぐには分からなかった。

だが、今日勲弥の身に起きた事象を考えれば、ピンときた。

吉川に手を握られた直後、トラックが突っ込んできたという事実を考えれば。

彼女の力の本質が、見えてこようというものだ。

「具体的には……私は、触れた人間から『運』を吸い取れる、というべきなのかしら。私も詳しく理解しているわけではないのだけれど、きつとそういうものなのだと思うているわ」

「『運』を、吸い取る」

吉川は頷いた。

「『運』というものも、実は複雑な概念で、定義が難しいところなのだけれど。とりあえず、『運』が足りない人間は酷い目に遭うし、『運』を多く持つ人間は良い目に遭う。そういうものだと思っ理解しておいて頂戴」

人間は日常的に『運』という言葉を使うが、吉川の中においては

若干異なるものであるらしい。

『運』は、いわばエネルギーのようなもので、量が存在する。スカラー量のようなもの、らしい。

『運』の量は増減する。それはどの人間にも、いつでも、起こっていることだ。『運』の量が多い日もあれば、少ない日もある。人間生きていれば、幸運な時も不運な時もある。それはつまり、その人間が持つ『運』の量の増減によるものだということだ。

「私はね、人が持っている『運』の量が見えるの」

「見える、っていうと……？」

「『灯火』がね、見えるのよ。人間の胸の辺りに。その『灯火』は、大きかったり小さかったりしていて、つまりその人の持つ『運』を表しているのね、きつと。」

たまに、物凄くツキまくっている人がいるでしょう。そういう人の『灯火』はとても大きくて勢いがあるわ。逆にツイてない人の『灯火』は小さくて、儚げなのよ」

各務君の『灯火』は普通ね、と吉川は無表情で言った。

すこぶる幸運でも不運でもない状態、ということでもいいのだろう。しかし、人間の運の状態が見えるというのは、特異な能力だ。

「なあ、『灯火』が消えるとどうなるんだ？」

「死ぬわ」

あくまで、無表情。

ひたすら、無感動。

吉川は淡々と、言う。

「『灯火』が消えた人間は、完全に『運』が尽きた状態。こうなっちゃってしまつては、もうどうしようもない。近かれ遠かれ、その人間は死ぬ。そういう運命になつてしまふの」

勲弥は息を呑んだ。

つまり、吉川天満は、人の死を予見できるということではないのか。

思わず、胸を押さえる。

今、自分の胸にも『灯火』があつて、それが消えれば、死ぬ。

「ねえ、各務君。これで分かったでしょう。私に関わった人間が次々不幸になる理由が。」

私が『灯火』を……『運』を奪い取っていたからよ。そして今日、各務君にも同じことをした。その結果、各務君の身にも不幸が降りかかったはずよね？」

勲弥は思い出す。突然歩道に突っ込んできたトラックのことを。

冗談でもなんでもなく、本当に死ぬかと思ったのだ。幸い、怪我もしなかったけれど。

不幸中の幸い、だ。

「今のところ、死なないように調節はしているけれど……その気になれば、殺せるでしょうね」

『灯火』が消えるまで、『運』を奪い続ければいい。

それだけで、人が一人死ぬのだ。

しかも、証拠が残らない。完全犯罪目白押しではないか。

寒気がした。

吉川天満が持つ能力は、勲弥の想像を大きく超えて、恐るべきものだった。

何故概念省は、今の今までこれほどの能力を持つ存在を放置しておいたのだろうか。何故彼女の力に気づかなかったのか。

……僕や一妃なんて、可愛いもんだぜ。これじゃまるでチートだ。触れるだけで人を殺せる。中学生の妄想だってもう少し凝った能力を考えるだろうに。

勲弥は吉川の顔を見る。

その表情から、彼女の心情を読み取ることは出来ない。

今、吉川は何を考え、何を思っているのだろう。

「私は、疫病神なのよ」

吉川は少し俯く。長めの前髪は、彼女の目を覆い隠してしまう。

「人間を不幸にしてしまうから。だから私は、疫病神なの」

「ちょ、ちょっと待てよ。おかしくないか」

勲弥は頭の中で思考を整理する。

吉川天満は、人間の『運』の量を視認し、奪い取る能力を持つ。
『運』を奪い取られた人間は不幸になる。

だから吉川天満は、人間を不幸にする。

論理的に矛盾はない。

だが勲弥は違和感を得ている。

「お前は自分を疫病神だと言う。『私に関わると不幸になる』と。けど人間を不幸にするっていうのは、つまりお前の能力に、お前の意図によるものじゃないか。

吉川、お前は自分に関わって欲しくないから、警告の意味で僕に能力を使ったよな。けど、それじゃおかしいんだ。本末転倒なんだ。誰かを不幸にしたくないのに不幸にしている、という矛盾があるんだよ」

言いながら、勲弥の頭の中で思考が整頓されていく。

「なあ吉川、それだけじゃないんだろう。お前が持つ能力は、人を不幸にできる。けど、それだけじゃないんだよな。他にあるんだよな、お前に関わった人間を不幸にしまっ、何かが。だからお前は人を遠ざける。拒絶する。孤立する」

一息。

「吉川、お前は言ったな。『私は死なないから』って。それと関係があるんじゃないのか」

未だ明かされていない謎。

それは昨夜、吉川が言い放った『私は死なないから』という言葉の意味だ。

ここで、その言葉が繋がってくる。論理的根拠はないが、直感的に勲弥はそう感じていた。

「どうなんだ、吉川」

「……驚いたわ、各務君。意外と、賢いのね」
本気で驚いている様子の吉川。

……えっ、僕って馬鹿だと思われてたのか？

若干、複雑な気持ちになる。

成績が悪いのは揺ぎ無い事実だが。

「各務君の言うとおりよ。触れた相手を不幸にする……それだけの力ならば、私はここまで孤独を求めなかったでしょうね。私の力は、他人を不幸にするだけでなく、私に幸運を与えてもくれるのよ」

「幸運を与えてくれる？ それは、どういう……」

「各務君。今から十二年前に起きた、飛行機墜落事故を覚えている？」

「墜落事故？ ああ、そういえばニュースとかで見たな……」

かなり大規模な事故で、乗客も乗務員も殆どが亡くなったと聞いている。

そう言えば、生存者が一人だけ存在したという話も聞いたことがあった。

「まさか」

「そう、そのまさか。その事故でただ一人生き残ったのが、私よ。家族は皆死んでしまったけれど。」

私は……私だけは運よく生き残ってしまったわ」

生き残ったということ。

それは幸運なことなのだろうが、しかし吉川にとってはどうなのだろう。

一人だけ生き残り。

独りぼっちになってしまった彼女。

「……それから私は、親戚に引き取られたわ。そこそこの年になった夫婦だったんだけど、子供が出来なくて悩んでいたそうで、私のことを大層可愛がってくれたものよ。」

でもね、強盗から私を庇って死んじゃった」

「……………っ!？」

今から十五年前。

押し入ってきた強盗が夫婦を殺害。

夫婦の養子である娘だけが、運よく生き延びた

そういう事件

だと。

吉川はまるで他人事のように、事件の詳細を教えてくれた。

「そんな曰くつきの女の子、誰も引き取りたがらないわよね。私は親戚を盥回しにされて、今に至るのよ」

分かるかしら、と吉川は問いかけてくる。

「私は、不幸中の幸いをいつも得ることが出来る。奇跡とでも言うべきラッキーが私の身には起こる。

でも私だけなのよ。いつだって幸運なのは私だけで、いつだって周りの人間は私の奇跡の犠牲になる」

誰かが幸せになる陰で、誰かが不幸になっている。

吉川が奇跡を得た裏で、誰かが犠牲になっている。

「だから私は死なないのよ。これまでに色々な不運が私の身に降りかかったけれど、何らかの形で私は助かっているの。

トラックに轢かれそうになったと思ったら、見知らぬ男の人が私を突き飛ばして助けてくれたわ。私は擦り傷を作った程度で済んだけど、助けてくれた人は後遺症が残るほどの重傷を負った。

階段から足を滑らせて落ちたけれど、誰かが下敷きになってくれて私は軽傷で済んだ。下敷きになった人は大怪我をした。

他にも…… あったかしら。忘れちゃった」

絶句。

勲弥は、言葉を失っていた。

自分を疫病神だと揶揄する吉川の気持ち、少しだけ分かった。

確かにこれでは、人を遠ざけたくなるというものだ。

己の身に何か起きた時、他者を犠牲にしてでも勝手に助かってしまふ、という恐るべき力。

一体、吉川がどれほどの幸運を得て、どれほどの犠牲を強いてきたのか。

想像するのも恐ろしい。

「……だから、私は死なない。独りで生き続けて、誰かを不幸に続ける。こんなの、疫病神と呼ばずして何と呼ぶのよ……」

吉川は俯いた。

平坦な声色が、若干揺らぐ。

彼女にしたって思うところはあはずだ。無いはずがない。

どれほどのものを抱えて今まで生きてきたのか。想像するに余りある。

「私だって、これでも頑張っているのよ。少しでも人との関わりを減らして、一人でいて、極力誰かを巻き込まないように……。本当は学校にだって行きたくないわ。だから出席日数ギリギリになるようにして。それで、少しでも人を不幸にせずに済むなら……」

……ああ。

泣きそうになっている吉川を見て、勲弥は一つの確信を得る。

吉川天満は、他人が不幸になることを良しとしない人間なのだ。

誰かの不幸に涙し、誰かの幸せを喜べる、そういう人間なのだ。

何が疫病神なものか、と勲弥は内心で吐き捨てる。

少なくとも吉川自身は、望んでそうなったわけではないのだ。

「……駄目だぜ、吉川。ああ、全然駄目だ。そんなやり方じゃ、お前が幸せになれない」

「っ、各務君、分かっているの！？ 私が幸せになれば、その陰で不幸になる人間がいるのよ！」

「そんなのは誰だって、そうだろうが！」

吉川の声が大きくなるのにつられて、つい勲弥も大声を出してしまった。

客が自分たちだけでよかった。店主には悪いが、遠慮は要らない。言わなければならいことが、ある。

「いつだって、誰だって、誰かを犠牲にしてるんだよ。誰かが幸せになれば、どこかで誰かが泣いてたりするもんだよ。そういうもんなんだよ。お前だけが特別に加害者だなんて思うなよ。そしてお前だけが特別に被害者だなんて思うな。皆、誰だってそういうジレンマを抱えて、向き合って、生きてるんだよ。そうするしかないんだよ」

幸福の対価は不幸。

奇跡の代価は犠牲。

生きている限り、誰かを犠牲にせずにはいられない。

人間はそういう生き物だ。

「お前が幸せになる陰で不幸せになる誰かがいる。ああ、そうだな。でもな吉川、お前が不幸になれば、誰かが幸せになれるのかよ。お前の不幸の対価は誰かの幸福なのか。お前の犠牲の代価は誰かの奇跡なのか。なあ、そうじゃないだろ。お前が望んで不幸になったって、皆を幸せに出来るわけじゃない」

「じゃあ、どうしろっていうのよ……。また誰かを犠牲にしてしまいかもしれないって……。私のせいで誰かが死んでいくのを、傷ついていくのを、黙って見てるって言うの！？ 運が悪かったと、そう割り切れとでも言うつもり！？ そんなの……。そんなの、無理よ」

不運だったと、その一言で割り切れるはずがない。

それがどんな偶然だったとしても、罪悪感を感じずにはいられない。

自分のせいだと、自分を責めずにはいられない。

「……吉川、お前は優しいよな」

「なっ……」

眉を立てて怒る吉川に対し、勲弥は微笑む。

「お前は優しいから、誰かを踏み台にして自分だけが幸せになることが許せないんだ。自分のせいで他人が傷つくのが嫌なんだ」

でもな、吉川。それじゃあお前が幸せになれないじゃないか。自分を幸せに出来ない人間が他人の幸せを願うなんて、思い上がりだろっ」

言いながら、勲弥は思う。賀持が言いたかったのはこういうことなのかもしれない、と。

「吉川。お前のやり方は間違ってる。今のお前のやり方じゃ、他人も傷つくし、何よりお前が傷つくんだ」

周囲の人間を遠ざけ。

近寄ってくる人間を拒絶し。
歩み寄る人間を不幸にする。
その繰り返し。

そんな方法で、一体誰が幸せになれるというのか。
「諦めるなよ、吉川天満。お前が不幸せにならずに済む方法があるかもしれない。」

お前はもう感じたはずだぜ。お前の知らない『世界』がある。お前の常識を覆す『技術』がある。その中には、お前の助けになれる力があるはずだ」

「そんなの、希望的観測じゃない。そんな都合のいいものが……」
あるはずない、と吉川は言いたかったのだろう。

だが、勲弥は言わせない。

「そうだな、ないかもしれないよな。でも、あるかもしれない。探す前から諦めるなよ。本当に人を不幸にしたくないって言うのなら、お前は幸せになることを諦めるべきじゃない」

そうする義務がある。

周りを巻き込んで不幸にしてしまふ、そんな力を宿す身として。

「お前の力 他人の『運』を操ってしまうその力は、どこかの世界の概念術によるもののはずだ。必ず、お前の力のルーツとなった世界が存在する。それを探そう。僕も手伝うから」

「……本当に？ 私は……私の力は、他のひとを不幸にせず済むの？」

吉川の瞳に、ほんの少し光が差す。

「吉川がそれを望むのなら」

力強く、勲弥は言う。

真っ直ぐ、吉川の目を見据えて。

「分かったわ、各務君。少しだけ……あなたを信じる」

目に溜まった涙を拭い取りながら、吉川は言った。

「まさか、昨日知り合ったばかりのあなたに説教されるなんて、思わなかった」

「説教で」

勲弥は苦笑する。

そんなつもりはなかったのだが、なるほど確かに、そう聞こえてしまうかもしれない。

勲弥としては、ただ今の吉川のやり方が間違っているということ、希望はあるかもしれないということを伝えたかっただけなのだが。

「ありがとう、各務君」

微笑と共に、吉川は礼を述べる。

勲弥は照れくさくなって、手を横に振った。

「お礼を言うのはまだ早いつて。ちゃんと事が解決したら、そのときに言ってくれよ。僕はまだ何もしてないんだから」

まだ、問題が解決されたわけではない。

ただ吉川が、少しだけ、選択肢を得ただけなのだ。

本当に大変なのは、これからだ。

第九話 「私は、疫病神なのよ」(後書き)

お久しぶりですいません。

感想・評価お待ちしております。

第十話 「あなたは信念で動く人間だ」

『狩人』ロベルト・ブラックは、金で動く人間だ。

報酬を貰って、獲物を狩る。それだけを生業とする概念術師なのである。

言ってみれば、暗殺者だ。

故郷たる『因果世界』では、既に重罪人として指名手配を受けている身でもある。異世界間交流の盛んな世界では、表立って行動できない。

この世界 『理法世界』はまだマシなほうだ。

概念術の文化が存在せず、異世界の存在が隠匿される、イレギュラーな世界。

他の世界との交流は細々と行われているが、他の、概念術が発展した世界に比べれば、ロベルトのような犯罪者にとっては生き易い世界だ。だからこそ、色々な世界の犯罪者がこの世界に逃げ込んでくるのであろう。

しかし。

或いは、だからこそ。

ロベルトにとって、自らの存在を捕捉されてしまったことは、完全に想定外だった。

……どうしたものか。

日本概念省に自分の顔と名前が知れた以上、居場所を掴まれるのも時間の問題と言える。

一旦、他の世界に逃れるか。

世界間移動は足がつきやすい。この世界に来るときだって、それなりのリスクは冒しているのである。

「……これは、どうも。ロベルト・ブラックさん」

町外れの、古びた廃工場。

夜間ということもあって、周囲一帯、人気は皆無に等しい。

工場の中に散らばる廃材の間に、ロベルトは立っていた。

そして向かい側に、もう一人、出現する。

いつからそこにいたのか、まるで悟らせない。気がつけば、そこにいた。

法衣を纏った、薄緑色の髪の男だった。年齢は、恐らく二十代半ばといったところ。

細い目は弓を描いており、人の良さそうな笑みを浮かべている。

「相変わらず、白いスーツなんて目立つものをお召しになっちゃって。逃走生活を送る者の服装とは思えませんよね」

法衣の男は、いきなりそんなことを突っ込んできた。

ロベルトにとって、服装が目立っていることなど百も承知である。

「俺の服装にケチをつけに来たわけではないだろう、ネクタリオス」

ロベルトがそう言うのと、法衣の男　ネクタリオスは、「これは失礼」と言って、咳払いを一つ。

「あなたの報告を聞きに来たんでしたね。まあ、おおそのことは分かっていますよ。『狩り』は失敗。そうでしょう」

「言い訳はしない。だが、次は負けん」

日本概念省・入国管理局。

なるほど確かに手ごわい相手ではあるが、しかし勝てないとはまるで思わない。

確かな勝算を、ロベルトは感じている。

「ですがあの少女　吉川天満は一筋縄では行く存在ではありませんせんよ」

吉川天満。

ロベルトの標的。

ごく普通の少女だと、ロベルトは思っていた。

昨夜は、至極あっさり『狩場』へと閉じ込め、あとは殺すだけだったのだ。邪魔が入ったが。

しかしあの時、ロベルトは違和感を得ていた。

……あの少女、微塵も死を恐怖していなかった。

これから殺されるというのに、吉川天満はまるで怯えた様子を見せなかった。

抵抗する素振りさえ。

……自殺志願者だったのか。あるいは。

自分が死なない確信でもあったのか。

どちらにせよ、ロベルトはそこにただならぬものを感じたのだ。

「あなたに貸した『守人殺し（シールドブレイカー）』さえあれば、彼女を殺せるのではないか……。そう思ったのですが、無理でしかねえ。まさか日本概念省に奪われてしまうとは」

「……確かに、防御破壊の概念武装は穴があったが、しかし次は…

……」

「ああ、いえいえ」

ネクターオスは首を横に振った。

「申し訳ありません。言うのを忘れていました。勘違いをさせてしまったようだ。

『次』は、無いんですよえ」

「何」

次の瞬間。

空間が、爆ぜた。

「っ！？」

咄嗟にバックステップを踏んでいなければ、死んでいた。ロベルトは冷や汗を掻く。

……何が起きた。

何の前触れも無く、爆発現象が生じた。

概念術だ。疑う隙はない。

だが、ネクターオスはそんな素振りを全く見せなかった。と言うことは、別の誰かだ。

「へえ、避けるのか。さすがは『狩人』ってトコかよ」

声は、背後から。

慌てて振り向くような愚は犯さない。ロベルトは横に跳び、ネク

タリオスと、もう一人を同時に視界に収められる位置へと移動。
と同時に剣を手元へ呼び出す。

異なる空間に存在する物体を、因果を捻じ曲げることで異なる空間に現出させる術だ。因果体系概念術の中でも、空間封印と並んでポピュラーな術式である。

ロベルトは視界を確認する。

向かって右端に立つネクタリオスは、特に動きを見せない。

問題は左側に立つ男だった。

逆立った金髪と、右眼を潰す大きな傷跡が目立つ、若い男だ。

黒い革のジャケットを着ていて、首から十字架のネックレスを提げている。

右手には、赤みがかった光沢を放つ銃剣が握られている。刃の部分がかなり長めに出来ていて、刃渡りは90センチほどある。少なくとも剣としての使い勝手は酷く悪いだろう。銃剣というよりも、それはガンブレードだ。

男は不敵な笑みと共に、こちらを見ている。

「……これは何の真似だ、ネクタリオス」

「いえね。簡単に言えば、あなたの仕事はもうお終いだということ
でして。続きは、そちらにいらっしゃるミハエル・ディートリッヒ
さんが片付けて下しますよ」

ふん、とロベルトは鼻を鳴らした。

一度の失敗で見切りをつけた、というわけだ。特別理不尽という
わけでもない。

だが、みすみす始末されてやるわけにもいかない。

「まあそういうことだ。『狩人』さんもそろそろ潮時なんじゃねー
の？」

「舐めるな」

そう言つと同時、ロベルトは術式を発動。

『狩場』を作り出し、自分と獲物だけがそこに移動する。

空間を因果的に孤立するのではなく、重層空間を作り出しそこに

移動する、ロベルトのオリジナル術式。

一瞬にして移動は完了。閉鎖された空間に、ロベルトと金髪の男だけが存在する。

「なるほど、これが噂の『狩場』ってヤツか。すげえな」

男　ミハエル・ディートリッヒは、余裕だ。

その態度は、昨日戦った少年を彷彿とさせる。

何となく、不愉快だった。

……早々に、決着をつける。

油断しているならばそれでもいい。

その余裕が崩れる頃には全てが決着しているだろう。

ロベルトは術式を発動。因果を捻じ曲げ、ミハエルの背後へと瞬間移動する。

既に剣は振りかぶっている。あとは薙ぐだけで首を取れる。

……終わりだ！

振り切った。

だが手応えがない。

かわされた。

ロベルトの視界内に、ミハエルの姿が無い。

消えた。

だが、『狩人』の嗅覚は、一瞬にして獲物の位置を捕捉する。

「上か」

《獲物は追われ続ける》。

そういう概念が『狩場』内部では作用しており、『狩人』は常に獲物の位置を知ることが出来るのだ。

昨夜の戦いでは使われなかったが、今回はそれが活きる。

果たして、獲物は空中にいた。

跳躍でロベルトの剣をかわしたのだろう。だが、それが命取りだ。

空中では身動きがとれない。

「カツ」

ミハエルが笑った。

ガンブレードの切っ先をこちらに向ける。

赤く光るその刃に、ロベルトは悪寒を感じた。

故に、後退。

直後、爆裂。

さつきと同じように、空間が爆発した。

……そういう、武器か！

ロベルトのガンブレードは、空間に爆発を起こすことができる。

どういう条件で、どういう構造でそれが為されるのかは分からないが、厄介な武器であることは確かだ。

爆発によって生じた噴煙。その中から、着地したミハエルが矢のように飛び出してくる。

速い。

瞬間移動を使う余裕は無い。だからロベルトは、剣でミハエルのガンブレードを受け止めた。

「いちいち嗅覚が優れてやがるぜ、『狩人』。よく避けるじゃねえか」

ロベルトの剣と、ミハエルの刃がせめぎあう。

鏑迫り合い。

だが、ロベルトは己の有利を感じている。何故なら、

……この間合いでは、爆発は起こせない。

これだけ近付いていれば、爆発の巻き添えになることは必至。故にミハエルは、爆発の能力を使えない。

今が、チャンスだ。

ロベルトは次の術式　瞬間移動の術式の準備をする。

一瞬でこの拮抗は崩せる。

だが、予期せずして、せめぎ合いが終わりを告げた。

「俺がただ突っ込んできたと思ったら、大間違いなんだよなあ」

ミハエルがニヤリと笑う。

次の瞬間、ミハエルは呪文のように呟いた。

「《剣は何も斬り得ない》」

その言葉が紡がれた瞬間、ロベルトの剣が、砕け散った。
拮抗が終わる。

ミハエルの刃が、迫る。

「な……っ!？」

そのまま、ミハエルのガンブレードが、ミハエルの胸を一突きにした。

白のスーツが、見る見るうちに血で染まっていく。

辛うじて心臓は外したものの、深手だ。

眼前で、ミハエルが勝ち誇った笑みを浮かべる。

「破壊式、だよ。物体の定義を否定することが出来る」

剣は何かを斬るものである、という概念を否定することで、剣が機能不全を起こし、砕け散ったのだ。

「俺の概念武装 『シャルラハローテア・レーゲン緋い雨』の機能はそっちさ。否定式を瞬時に構築し、あらゆる武装を機能不全に陥れる」

口から血を吐きながら、ロベルトは己の不覚を悔いる。

よく考えれば分かることではないか。近距離では爆発が使えないことなど、ミハエル自身も承知していたはず。それでもなお距離を詰めてきたということは、それ相応の策が合ったということ。

浅はかだった。

「爆発の方は、あくまでサブウェポンさ。切っ先を向けた空間に爆発を起こすっただけ。まあ、使えるんだけどなこっちも。 こんな風に」

刃をロベルトに突き立てたまま、ミハエルは引き金を引いた。

爆発。

ロベルトの胴体が、爆ぜ散った。

術師が死亡したことで、『狩場』が解除された。

ロベルト・ブラックの死体と共に元の空間に回帰したミハエル・デイトリツヒは、変わらず佇んでいる法衣の男 ネクターオス

を一瞥する。

「やあ、早かったですね、ミハエルさん」

「……『狩人』ロベルト・ブラックね。ありやーどっちかていうと暗殺向きだろ。タイマン張るにはちよつとばかり足りてねえな。…それにしても、随分と切り捨てるのが早いじゃねえの」

「彼は金で動く人間ですからね」

ネクタリオスは穏やかな笑みのまま、言った。

金で動く人間は信用されない。

どの世界でも、そうなのだ。

「それに、彼は日本概念省に捕捉されてしまいましたからねえ。このまま彼を使い続けるのはリスクが大きいでしょ」

ミハエルの側に転がるロベルトの死体には眼もくれない。

ネクタリオスにとって、自分たちは使い捨ての駒に過ぎないのだということ、改めて実感する。

間違えれば、自分もこうなるのだ。

「その点、あなたにはその心配がありませんからねえ。あなたは信念で動く人間だ。そして……」

「一度死んだ人間だ、ってな」

己の右眼の傷を、そつと撫でる。

「俺は仕事を果たす。だからネクタリオス、テメエは邪魔するな。俺が要求すんのはそこだけだ」

「勿論です。期待していますよ、かつてドイツ概念省で最強と謳われたあなたの力をね」

そう言つて、ネクタリオスは姿を消してしまった。

廃工場に一人残されたミハエルは、足元の死体に目をやる。

ロベルト・ブラック。

「お前もついてねーなあ。よりもよつて、標的が『あれ』だなんてよ」

赤いガンブレード 『緋い雨』を別空間に収納。

そして、煙草を取り出し、火をつける。

「『あれ』は殺せねーよ。そういう存在だからな。暗殺なんて出来るわけがねえ」

吉川天満。

そういう名で呼ばれていると、聞いている。

天満、とはまた皮肉な名前をつけたものだ、とミハエルは感心すら覚えた。

「人間の意思なんか関係なく、運命が守っちまうんだからな。とんでもねえぜ、ったく」

吉川天満を殺すには、運命という途方も無く大きな力に勝利しなければならぬ。

運命。

何と下らない言葉だろうか、とミハエルは憤る。

だが、確かにあったのだ。運命と呼ばれるものが絶対的だった世界が。

「『運命世界』唯一の生き残りにして、最大の遺産。吉川天満は…誰にも殺せない」

俺にもな、とミハエルは小さく呟いた。

第十一話 「これが青春というものなのかしら」

金曜日。

それは、天満が園崎一妃と揉め事を起こし、概念省に連れて行かれた次の日だった。

吉川天満は、その日もいつも通りに登校した。

だが、いつもと違うことが一つだけあった。

昼食を、勲弥と一緒に取るようになったのだ。

いつも昼休みになると、天満は適当な場所を見つけて一人で弁当を食べている。教室にいと騒々しいので、大概裏庭などの静かな場所だ。

今日もそうしようと教室を出ようと思ったら、各務勲弥に出くわした。

「あ、吉川、丁度良かった。もしよければ、一緒に昼飯食べないか」

「え、えっ……！？」

驚天動地。

吉川天満の人生において、他人から昼食に誘われるという事態は生まれて初めてだった。

……か、各務君とお昼ご飯っ！？

天満は今までに無いほどに胸が高鳴っているのを自覚する。だが、

「その、一妃も一緒なんだけど、構わないかな」

現実には園崎一妃も交えて三人での昼食だった。

……私が馬鹿みたいじゃない。

落胆したことは言うまでもない。とは言え一人で勝手に舞い上がって期待していただけなので、お門違いであることも確かだった。

昼食は、中庭で取った。芝生の上に腰掛けて、誰かと一緒に昼食を食べる……それもまた天満にとっては初めての体験だった。

……これが青春というものなのかしら。

芝生に座った天満は、しみじみと感じ入ってしまう。

誰かと共に在ることを放棄した天満にとって、青春というのは決して得られぬものだった。

友達と一緒に、ご飯を食べたり、映画を観に行ったりするという

きつとそれは、多くの人間にとって当たり前のようにあるものなのだろう。そして自分には決して得られぬものだと、天満は思っていた。

……結局、私は悲劇のヒロインを気取って自分の殻に閉じこもっていただけなのかも……。

そう思うと、無性にこの間までの自分が恥ずかしくなってくる。とは言え、自分が間違った選択をしていたとも思わない。

独りでいる限りは、他人を傷つけずに済むのだ。

自分を除いては。

天満にとつては、思っても見なかったことだった。或いは、気づいていながらも無視していただけたのか。

……自己犠牲なんて柄じゃないんだけどね。

「さて」

隣に腰掛けた勲弥が、おほんと咳払いをしてから言った。

ちなみに芝生には、勲弥を天満と一妃が挟む形で並んで座っている。

「今回集まってもらったのはさ、まあ訳があるわけだな」

「訳？」

天満は首を傾げる。

単に昼食に誘ってくれたわけではない、ということなのか。少し落胆している自分がいることに、天満は驚きを得た。

「吉川、というわけでちょっと聞いてやってくれないか。こいつの話」

そう言って勲弥は立ち上がると、一歩後ろに下がる。

すると、天満と一妃が対面する形になった。

……う。

天満にとつて、園崎一妃は軽いトラウマにも似た存在だ。

元はと言えば自分が勲弥の『運』を奪い取り、彼に『警告』をしたことが原因で彼女に敵とみなされてしまったわけだが、それにして園崎一妃という存在が、天満には怖かった。

「ほら、一妃」

「……………」

銀髪紅眼の少女は、細く形のよい眉を寄せ、唇をきつと結んでいる。

イタズラをした子供が親に見つかって叱られている時のような、そんな雰囲気だった。

勲弥に促され、一妃はやがて天満に視線を合わせてきた。

「こ、この間は、すいません、でしたっ」
ぺこりと。

頭を、下げてきた。

「……え、あ」

この間のことが、とすぐに分かった。

同時に、勲弥の意図も理解できた。

和解の場なのだ、ここは。

勲弥はこの昼食の場で、天満と一妃の間にあるわだかまりを解消しようとしている。

そのことが分かれば、天満が取るべき対応は一つだった。

「……私も、この間はごめんなさい。あなたの大切な人を……傷つけようとして」

一妃がどれだけ勲弥のことを大事に思っているかは、天満にも何となく分かる。

勲弥に敵意を向けた自分を、一妃が許さなと思ったことも自然な反応だ。

「本当にごめんなさい」

天満は、誠心誠意、頭を下げた。

そうするべきだと思ったからだ。

「……これで、八方丸く収まった、よな？」

勲弥は一妃と天満の肩に手を置いてはにかんだ。

実際、そこまで単純な問題ではないような気もするが、少なくとも天満には一妃を糾弾する意図など毛頭ない。

一妃がどう思っているかは、分からないが。

「……私は、納得してない。あなたが、勲弥の敵なら、私はあなたを許さないから」

「っ……」

「でも」

紅色の眼光が、その鋭さをやや和らげた。

「あなたが勲弥の敵じゃないなら、私はあなたの敵にならない。約束する」

そう言つて一妃は、両手で天満の手をぎゅっと握る。

その握力自体はてんで大したものではなかったが、振りほどこうとしても決して出来ないような力強さを、彼女の体温と共に感じた。

……ああ、この子もやっぱり人間だ。

握られた手に感じる温もりは、紛れも無く生きた人間のものである。

心のどこかで天満は、やはり園崎一妃を、人外の何かとして恐れ
ていたのだろう。

「……約束するわ。私は各務君の敵じゃない。私は 各務君の友達よ」

少し恥ずかしかったが、天満は言った。

各務勲弥は、吉川天満にとって『友達』であると。

天満がずっと拒絶してきたもの。遠ざけてきたもの。
それを得たのだと。

「……勲弥、勲弥は、吉川天満と、友達？」
「もちろん」

はつきりと勲弥が頷いてくれたことが、天満にとっては何より嬉

しかった。

「……じゃあ、友達。私にとっても」

一妃はそう言っと、握るのを止めて、代わりに片手を差し出してきた。

仲直りの握手、ということなのだろう。

天満は口元を緩め、その手を握り返してきた。

「よろしくね、園崎一妃さん」

「よろしく。一妃でいい」

「そう、じゃあ私のことも天満でいいわ。ああ、出来れば各務君もそう呼んでくれると嬉しいわ」

天満の傍らに立つ勲弥が、少し驚いたように自分を指差した。

「苗字で呼ばれるの、あまり好きじゃないの。だから、下の名前で呼んでくれるほうが嬉しいかな」

「……そっか。分かった、吉川……じゃなくて、天満」

「うん」

天満。

自分の、名前。

そういう風に呼ばれるのは、一体どれだけ久しぶりなことだっただろうか。

……仲直りできたみたいで、良かったな。

勲弥は、内心で安堵を得た。

吉川天満を、園崎一妃と和解させること。それは勲弥にとっては最優先課題だった。

これから先、天満を護衛していく上で、一妃の助力は必須だ。無論、勲弥だけで片付けることが出来ればそれに越したことは無いのだが、賀持や美冴の忠告もあり、一妃の力も当てにしないではない。

今回の事件はそれだけの重要性を秘めている、というのは、概念

省・入国管理局の総意でもあった。

それは、今朝方勲弥が知らされたあるニュースに起因している。

……ロベルト・ブラックが、殺された。

今朝、美冴から電話でそのニュースを聞き、勲弥は少なからず驚いた。

概念術師として対峙し命をかけた戦いを演じたからこそ分かる。

ロベルト・ブラックは紛れもない強敵だった。

その彼が、殺されたと言うのだ。

一体誰の仕業なのかは分からないし、どういう経緯があったのかも不明だ。

だが局長の賀持はこれを重く見て、警戒度を引き上げた。その上で勲弥に与えられた命令は、『吉川天満から目を離すな』ということだった。

彼女の護衛。

今回、天満と昼食を取っているのは、そういう意味も含んでのことだ。

出来る限り、彼女と一緒にいる方がいい。いつ何時、吉川天満を狙う刺客が現れるか分からないのだから。

ロベルト・ブラックは死んだが、それで吉川天満が危険から解放された、などという考えは楽観的に過ぎるというものだった。

裏がいる。

何らかの理由で、吉川天満の命を狙う誰かが。

ロベルト・ブラックはあくまで氷山の一角に過ぎない。

……学校にまで襲撃してくるとは、思えないけど。

用心するに越したことはないだろう。

「……勲弥。お昼食べよ」

「ん。ああ、そうだな」

どんな時でも食事は大事だ。そういうわけで勲弥も、中庭でのランチを堪能することにする。

のどかな昼下がり。空は雲ひとつ無い快晴だし、時折吹くそよ風

が頬を撫でるのはとても気持ちいい。

中庭を見回すと芝生や木々が景色を緑に彩っている。自分たち以外にも昼食を取ったり談笑する生徒たちの姿が見受けられるが、騒々しさはどこにもない。

平穏が、そこにはあった。

それは、勲弥が守ろうと決意したものである。

……それにしても、やたらと周囲の視線が集中しているような。離れた場所にいる集団や、過ぎ行く人々の視線が、勲弥たちに向いている気がする。

よく考えればそれも当然だ。勲弥の隣にいる二人は、学校でも屈指のルックスの持ち主で有名である。

右にいたのは園崎一妃。銀髪紅眼という非常に目立つ色彩に加え、浮世離れた美貌の持ち主ということでも有名だ。但し、対人コミュニケーション能力に若干の難アリ、という註釈が加わるのだが。

そして左にいたのは吉川天満。飾り気は全くないのにも関わらず、誰もが「綺麗だ」という感想を抱くような美人だ。但し、関わりと不幸になる、という噂が纏わり着いているのだが。

……要するに、目立つ二人に囲まれている僕はもっと目立っててわけね。

納得した。

この状況はいわゆる「両手に花」というやつだ。
だとすれば喜ぶべきなのだろう。

「……各務君、何ニヤニヤしているの？」

隣で天満が怪訝そうな表情を浮かべていた。

勲弥はやや誇らしげに胸を張る。

「僕は今間違いないリア充だ」

「……リア充。そうね、確かに……。中庭で異性の友達とランチだなんて、リア充極まる行いだわ」

天満も満足げな笑みを浮かべる。

「分かるか、天満」

「ええ、分かるわ各務君」

勲弥は天満とがっちり握手を交わした。

同じ友達がいらない人間同士、通じ合うものがあつたということだ。

「『りあじゅう』って、何？ 鰻重の仲間とかかな」

一人、一妃は訳が分からず、首をひねるのみだった。

第十二話 「これって、デートなんじゃないかしら」

……どうしてこんなことになったのかしら……。

自分は夢でも見ているのではないか、と天満は己の頬をつねってみる。

痛い。ということは現実なのだ。

天満は、駅前のショッピングモールにあるシネマコンプレックスにやって来ていた。

天満がいるのはロビーで、チケット売り場や売店がある。壁には上映予定の映画のポスターが貼ってあったり、大きなモニターで予告編を上映している。

休日ということで、ロビーは人で一杯だった。チケット売り場や売店には行列が出来ているし、上映時間までの時間を潰している人々の姿もある。

天満はと言うと、ロビーの端っこにある長椅子に座って、ぼうつとしていた。

……こんな大きな映画館、初めて来たわ……。

とても小さな頃、まだ両親が存命だった時に、住んでいた町の小さな映画館に映画を観に行った記憶は微かにある。だが両親が死んで以来は、映画館に行く機会は無かった。

映画そのものは嫌いではない。漫画喫茶などに泊まる時はよく見ている。だが映画館に行くとお金がかかってしまう。それが嫌で、天満は映画館へ足を運ぶことは無かった。

その天満が今日、何故映画館に足を運ぶことになったのかと言えば、それは、今チケット売り場の行列に並んでいる同級生の少年に誘われたからだった。

……まさか、各務君に映画に誘われるなんて、思わなかったな。天満は思い返す。

今日 土曜日は、午前だけ授業がある日だった。

四時限が終われば帰宅できるのだが、帰ろうとしたら、勲弥に声をかけられた。

映画を見にいかないか、ということだった。

最初、天満はその言葉の意味を理解できず、硬直してしまった。自分が誘われているのだと気づいたのは、十秒ほど経った後。

「よ、よろこんでっ」

少々テンパりながらも、天満はそう答えた。

しかし未だに、天満は現状を受け入れられずにいた。

……か、各務君と、二人で……！

そう。今回は、園崎一妃もいない。

二人きり。

その言葉の意味を考えると、天満は自分の顔が赤くなるのを感じた。

男女が、二人で、映画を見に来るといふ行為の意味。

……これって、デートなんじゃないかしら……！

「お待たせ。ごめんな、待たせちゃって」

「ふぁっ!？」

不意をつかれ、声を裏返らせる天満。

二人分のチケットを持って帰ってきた勲弥は、不思議そうに首をかしげた。

「大丈夫か？」

「え、ええっ。大丈夫よ、大丈夫……。テンパってないわ」

「そうか？」

天満は力強く頷いた。

……変な女だっと思われないようにしないと。

折角、友達になれたのだから。

不安は、ある。

また何か『不幸』が起きて、それに勲弥を巻き込むのではないか、という不安。

或いは、勲弥を犠牲にして自分だけが助かるのではないか、とい

う不安だ。

天満は、ずっと目を細める。すると、勲弥の胸の辺りに、『灯火』が見えた。

それこそが、人間が持つ『運』を示す目印となる。

勲弥の『灯火』は、特に問題なく燃えている。大きくもなく小さくもなく、ニュートラルな状態だ。

この『灯火』が消えた人間は、死ぬ。

そういう運命を、課される。

運命。つまり 不可避の死だ。

……あの飛行機事故の時、乗客全員の『灯火』がふっと消えたのよね。

今でも思い出すことが出来る。自分以外の全ての人間の『灯火』が一斉に消失した。その後、飛行機は墜落して自分だけが助かった。

『灯火』が消えるところを目にしたのは、あれが初めてだった。

人の死を、事前に見るという能力。

何より恐ろしいのは、

……私が望めば、自分で『灯火』を奪い取れるということ。

以前、勲弥にしたように。

触れるだけで、天満は他者の運を奪い取れる。

『灯火』を、消せる。

考えただけでぞっとする話だった。自分はいとも容易く人の命を奪えるのだ。触れるだけでいい。

この話を聞いた勲弥は、どう思ったのだろうか。彼の知る世界

概念術師の世界には、触れるだけで人を無条件に殺害できるような凶悪な力も、あるのだろうか。

「ほい、天満。チケット」

「え、ええ。ありがとう各務君。ごめんなさい、並んでもらんじゃないって」

「いいっていいって。んじゃ、行こうぜ」

勲弥は冷や汗を掻いていた。

今が映画上映中でよかった。もしも明るかったら、自分がテンパっているのが一目瞭然だったろう。

……超気まずい。

スクリーンに映し出されているのは、主人公とヒロインとの濃厚なラブシーンだった。それはもう熱烈な絡み合いで、隣で見ている天満はどんな顔をしてみているのか気が気でない。

ハメられた、と勲弥は今更ながら悟った。そもそも今日の映画鑑賞（デートとは言わない）は、美冴の提案だったのだ。「丁度優待券があるから行ってきなさいよ」ということだったのだが、見る映画が決まっている類のものだった時点で気づくべきだったのだ。これがドロッドロの恋愛映画であることに。というかタイトルの時点で気づけ自分。

今頃、美冴はこの状況を想像してニヤニヤしているのだろうか、と思うと、怒りが湧いてくる。が、どうしようもないことだった。

……寝るのも失礼な話だしなあ。

勲弥からすると、恋愛映画というのは正直言って退屈なのだが、女性にとっては違うかもしれない。天満には意外と気に入るかもしれないということを見ると、あとで話を合わせられるよう、ちゃんと見ておくべきだろう。

今日の天満は、いつになく楽しそうだ。見た感じではあまりこういうところに来たことが無いようだが、楽しめているなら勲弥としても喜ばしい限りだった。ちなみに勲弥は一妃や暁美と共に映画をよく見に来ているので、その辺は慣れている。友達極少数と友達皆無の違いはこういうところに現れるのだな、と勲弥は冷静に分析してみせた。

……それにしても、男友達いねえなあ、僕。

高校に入って、男子と話す機会とて何度もあるのだが、親しくなるところまで至らない。顔も名前も知っているが、親しいかと言わ

れば疑問符が浮かぶ　そんな関係で終わってしまうのだ。それがどうしてなのか、勲弥には何となく分かっている。

……原因があるとすれば、やっぱり僕なんだよなあ。

決して誰かが悪いわけではない。自分が悪いのだ。

勲弥に社交性が致命的に欠けているわけではないが、どうしても管理局の仕事や、一妃のお守りなどで時間を割かれ、クラスメイトとの交流が殆ど出来ていなかった。それも一因だ。

何より大きいのは、

……僕が友達を作ろうとしなかったことだよな。

昔はそうでもなかったはずだが、成長するにつれ、人間関係に煩わしさを感じるようになっていった。その気になれば、友達と遊ぶ時間は作れただろう。だが、勲弥はそれをしなかったのだ。

できなかったのでは、ない。

やろうと思えば出来たはずのこと　だった。

「……吉川、ちょっとトイレ行って来る」

どうも劇場内は冷房が利きすぎている。勲弥は隣の天満に囁いて席を立った。天満からは曖昧な返事があっただけだった。どうやら見入っているらしい。

上映の邪魔にならないよう、姿勢を低くしそそくさと劇場を出て、トイレへ直行。

「……ふう」

用を足して、手を洗いつつ鏡を見る。

見飽きた顔が映っている。我ながら平凡な顔立ちだと思うが、唯一、紅い右眼だけが目立つ。

周囲にはカラーコンタクトだと言い張っている。お陰で高校では『遅れてきた中二病患者』だと揶揄されるし、家では家族から大顰蹙を喰らった。少しばかり心が折れそうになったものだ。

だが、これは言ってみれば『証』だ。

各務勲弥が、『全一世界』の全てを担っていくことの、証明。少しだけ、右眼が疼いた。それはまるで、胎児が母親のお腹を蹴

るような感覚。勲弥の中にいる『何か』が、己の存在を主張するかのような。

……心配しなくなつて、僕は全部背負つてくつての。一妃のことも含めてな。

『全一世界』は滅びてしまつて既に無い。だが、『全一世界』の全ては、各務勲弥と園崎一妃が受け継いでいる。

……ひよつとしたら、天満もそうなのかな。

人の『運』を視認し、吸収できる吉川天満の異能。その由来は、既に滅んでしまつたどこかの世界のものなのではないだろうか。

勲弥は、既に天満の能力について、概念省の方で調べてもらつてゐる。該当する情報は得られなかったが、既に滅んだ世界の中に、彼女の能力のルーツがあるかもしれない。日本概念省にデータは、現存する世界についてはほぼ全て押さえているが、既に滅んだ世界についてはそうとも限らない。何故ならば、世界はいくつも生まれでは消えていくものであり、一定の文明レベルを持ち、他世界と接触を持たない限りは、概念省のデータにも残らないからだ。

……調べてみる価値はある、か。

そんなことを思いながら、トイレを出て行こうとした時だった。

「おーい、誰かいるか」

男子トイレの一番奥の個室から、声が聞こえてきたのだ。

何事かと思つたが、トイレには他に誰もいないようなので、勲弥は自分が返答することにする。

「どうかしましたか」

「お、誰かいたか。よかったよかった。悪いんだが、紙が切れちまつたみたいでな」

「ああ、なるほど」

全てを察した勲弥は、すぐ側の個室からトイレットペーパーを１ロール手に取ると、一番奥の個室の扉の前まで歩いていった。

「上から投げ入れますよ」

「おう。頼む」

トイレトペーパーを投げ入れた。

無事に彼の手に渡ったようで、その後ちよつとしてから、水を流す音が聞こえてきた。

……つて、僕は何でわざわざ待つてるんだ!?

投げ入れた後に立ち去ればよかった話なのに、何故か勲弥は個室の扉の前で立っていた。何故だろう。

自分でも分からなかった。

「ふー……。お。助かったぜ。ありがとうよ」

出てきたのは、とにかく目立つ男だった。長身。金髪。隻眼。顔立ちから日本人ではないことも分かった。それにしては随分と流暢な日本語を喋っているが。

右眼をざっくりと断ち切っている傷跡に、否が応でも眼がいく。

カタギではないのだろうか。海外のマフィアとかだったらどうしよう。などと、勲弥は『入国管理局』の荒事担当とは思えぬ弱気を見せる。

だが、外人の男は至ってフレンドリーだった。

「いや、本当に参ってたんだ。お前さんがいなかったらどうなったことやら。今は丁度上映中で誰も入ってこねえしよ。本当にありがとな。何かお礼を……」

「いや、いいですよお礼なんて。それに友達も一緒に来てるんで、もう行きます」

「ん? そうか……?」

ふと、外人の男の視線が、勲弥の顔の一点を見ていることに気がついた。

右眼。

普通と違う 紅色の瞳。

見られるのは、いつものことだ。そのたびカラーコンタクトだと言つて、苦笑いを返されるのも。

「……お前、名前は?」

だが、名前を聞かれるということは 初めてだった。

経験に、ない。

「……勲弥です。各務勲弥」

名乗るべきではなかったかもしれない、と勲弥は思った。
だが、もう遅いのだ。

「カガミイザヤ……各務勲弥……そうか、お前が」

外人の男は、くつくつと笑った。

心の底から、おかしそうに。

「そうかそうか。お前が『そう』なのか。なるほど、なるほどね。
全く恐ろしいな、あいつの力は。あらゆる因果律を捻じ曲げて、『
巡り合わせ』を作っちまう。『命』を『運』ぶと書いて運命だ、つ
てのはよく言ったもんだよなあ」

「あの、何を……」

目の前の男の不審な反応に、勲弥は一瞬で警戒度を引き上げる。

バックステップを踏んで距離を取り、そして、その紅い右眼で、男
をじつくりと見据え

「心を読もうとしたって無駄だぜ各務勲弥。その手は俺には通じな
い」

否定。

外人の男が放った一言は、勲弥の心を揺さぶるに足りた。

隙が生まれる。その隙を突いた外人の男が、ぱっと右手を振った。
次の瞬間、空間が、隔絶される。

……しまった、空間隔絶術式っ！

たった今、この空間　どこまでが範囲かは分からないが　が
隔絶された空間となったのが分かった。因果体系概念術でも最もポ
ピュラーな、因果を隔絶した空間を作成する術式。

ロベルト・ブラックの『狩場』は空間の一部をコピーし重層空間
を作り出すものだったが、こちらは単純に空間を外の因果から『切
り離す』。

「……いいのかよ、術式使って。管理局にバレるぜ」

「構わねえよ。逃げるのには慣れてるんだ」

気づくと、外人の男の手には、緋色のガンブレードが握られている。その武装が放つ威圧感に、勲弥は身震いを感じた。あれは、ヤバイ。恐らくは何らかの概念武装だろう。それも、かなりレベルの高い。

「恩もあるしな。一応、名乗っておこうか。俺の名前はミハエル・デイトリッヒ」

ガンブレードの切っ先をこちらに向け、男　ミハエルは薄ら笑いを浮かべながら言う。

「吉川天満を、殺しに来た」
空間が、爆ぜた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5231r/>

招かれざる客の輪舞曲

2011年9月27日01時31分発行